

---

# 東方龍神録

超絶暇人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方龍神録

### 【Nコード】

N7874X

### 【作者名】

超絶暇人

### 【あらすじ】

拳咲 龍神

それが俺の名前。俺は金髪の女性に連れ去られ、気付いたら森の中で…はつきり言って…最悪の休日になってしまった。

果たして龍神はどうなるのか？

今回も同じ東方小説です。東方キャラ崩壊あるかもです。ご注意を

… ハーレム有り、コメディ有り？パロディ有りです。

第1話 知らない世界に俺はいた。 (前書き)

どうも、yousyunです。

新作書いちゃいました。

龍が好きなので、書いちゃいました。  
ではどうぞ。

第1話 知らない世界に俺はいた。

まず自己紹介をしておく…

俺の名前は

拳咲 龍神 (けんざき りゅうじん) 、

15歳だ。

変な名前？そんなのはわかっている。

今俺は、幻覚を見ているのか？

そうなったのも今から…

今から1時間前…

俺は休日を有意義に過ごす…

つもりだった。

俺には友達がいない。いるとしても、たまに会う幼馴染みぐらいだ。  
1ヶ月前に引越したんだ。

中3にもなつて、勉強もできない、友達もいない…

ああ…いつそのこと、死にたい。

この世界から抜け出したい。

？「なら、私達の世界にくる？」

一瞬、その姿を確認した。

帽子を被った金髪の長髪。

変な服を着た女性。

そして…

俺はその女性に連れ去られた。

気付いたら知らない森の中。  
と言っわけ…

龍「ここはどこだ？」

俺は歩いていた。  
ただひたすら、その先に道があると思ひ。

龍「おゝい！誰かゝ！」

当たり前、こんな森の中に人がいるわけ…

？「わはー。」

龍「？」

誰かの声でした。  
間違い無い。

人だ！

龍「おい！誰か！助けてくれ！」

必死に叫ぶ。このチャンスを逃したら、俺の人生は知らない森の中でENDしてしまう。  
それだけは嫌だ。だから、ただただ、  
叫ぶ。

？「ん？人間？」

龍「おい！助けてくれ！」

？「あは 人間だ」



俺の前に現れたのは黒服ドレスの少女。  
？何だ？地に足がついてないぞ？

龍「？」

？「あはは ねえ、あなたを食べてもいい？」

俺は耳を疑った。  
俺を…食べる？  
何を言っているんだ？

龍「あの…君は名前…何て言うの？」

俺はビビりながらそんな事を聞いた。  
逃げた方が良いのに、俺はバカだ。

？「私はルーミア、妖怪だよ。」

少女はニヤリと笑う。  
妖怪？絵本でしか聞いた事がないぞ？  
でも、本物なら…

ヤバイ！

•••

？何でだ？何で俺の体が動かない？  
動け！動け！俺の体！動け！！！！

少女はゆっくりと近づいてくる。

もう…ダメだ、終わりだ。

まだやりたい事がたくさんあるのに。  
ここで死ぬなんて…

ル「いただきま〜す？」

龍「うわあああああああ！！！！！！！！！！」

•••

あれ？生きてる。

体もバラバラじゃない！

少女は口から血を流して倒れている。

龍「よ、よくわからないけど、助かった！」

俺は起き上がり、また歩きだす。  
と…

龍「光？」

俺は光に向かって、走る。  
そして…

バサーーン

龍「やった〜！！！！」

俺は森から抜け出した。

が、つかの間…

龍「何だ？これ？」

俺の目の前に紅い館が建っていた。

く続くく

第1話 知らない世界に俺はいた。(後書き)

ちなみに超絶で最狂の三人とのコラボは検討中です。

次回は 龍神…お前は一体…  
のような力が覚醒!

ではまた次回。

## 第2話 俺の力は龍の力？（前書き）

主人公の力がなんと…

ま、龍なんてわかる方も多いと思いますが…  
ではどうぞ。



## 第2話 俺の力は龍の力？

前回の俺は…

金髪の変な服の女性に連れ去られ、知らない森の中に。

歩いていると黒服の少女に食われそうになり

(決して変な意味では無い) 逃れ逃れて森を抜け、紅い館が現れた。

龍「あの〜…」

?「はい？」

門に人がいたので尋ねる。

龍「ここは…どこですか？」

？「ここは紅魔館ですが…」

龍「あなたは？」

？「私は紅　美鈴　（ほん　めいりん）　です。」

チャイナドレスの女の人には不思議そうに答える。

紅「あなたは？」

龍「お、俺は拳咲　龍神。迷ったんだ…」

少年説明中…

紅「そうなんですか…」

龍「お願いです…助けてください！」

紅「…わかりました、さあ、とりあえず、お入りください。」

龍「…美鈴さん…」

俺は紅魔館に入れてもらった。

龍「すごく広いですね。」

紅「そりゃもう、私だってここで長く働いているけど、今だに驚くんですよ。」

龍「はあ…」

?「美鈴、仕事をサボって何をやっているの?」

突然現れたメイド服の女性は美鈴さんに歩み寄る。

紅「あ、咲夜さん…」

龍「待ってください!」

?「誰?」

龍「美鈴さんは悪く無い、俺が頼んでここに入れてもらったんだ。」

?「美鈴、本当なの?」

紅「はい…実は…」

少女説明中…

？「…わかったわ…私は十六夜  
、お嬢様に頼んでみるわ。」  
咲夜 (いざよい さくや)

龍「ありがとうございます。」

紅「良かったですね。」

咲夜さんが頼んでくれたおかげでとりあえず、お嬢様？に会う事になった。

龍「お嬢様ってどんな人なんですか？」

咲「心配ないわ、カリスマがすごいだけ。」

龍「カリスマ…」

咲「ここよ。」

咲夜さんはデカイ扉を指す。

龍「デカイ…ですね。」

コンコン

咲「お嬢様、連れて来ました。」

？「入りなさい。」

ガチャッ！

咲「失礼します。」

俺も扉を押してみたが、思いのほか軽かった。

龍「あの…し、失礼します。」

？「どござ、座って。」

龍「あ、どうも。」

？「レミリア・スカーレットよ、あなたは？」

龍「拳咲　龍神です。」

レ「じゃあ、龍神、あなたにやってもらいたい事があるの。いいかしら？」

龍「は、はい！僕に出来る事ならなんでも。」

レ「妹と遊んでくれる？」

龍「遊ぶ…ですか？」

レ「フランク、いらっしやい。」

お嬢様がそう言うと、ドアから赤い服の幼女が現れた。  
そう言えば、お嬢様も幼女？



フ「お兄さんが遊んでくれるの？」

龍「うん。うん。」

フ「あはは 嬉しいな」

笑顔がかわいいが背中に何かある。

龍「背中のそれは？」

フ「これは羽だよ、吸血鬼としての。」

今何て言った？吸血鬼？

フランは俺の手を掴み取り…

フ「あまり早く壊れないでね。」

フランはドアの中に俺を連れていった。

カチャ

龍「何を…」

フ「するんでしょ？弾幕ごっこ。」

龍「弾幕ごっこ？」

フ「行くよ?」

フランはその言いついでいきなむ…

ダッ

ダッシュで俺に近づいてくる。

龍「は、はあ…」

フ「それ!」

フリンは俺に拳を向ける。

龍「うわああああ!!!!!!!!!!」

俺は頭の中が真っ白になった。  
瞬間…

スパッ

俺はフリンの拳を止めていた。

フリン「？」

龍「・・・」

意識はあるが、どう見ても俺じゃない気がする。

ググッ

俺の手に自然と力が入る。

ヴォーーン!!!

俺の体は青い業火に包まれる。

龍「フウオオオオ…」



胸筋、腕、腹筋は8つに割れている。  
後ろには長さ1.5m程の尻尾、背丈は2mを軽く上回る。  
顔はあの、ドラゴン、龍の顔に…  
角は頭や背中に生え、手や足には鋭いツメ。  
特に足は人ではなく、獣の太い三本足。  
目もキリツと鋭く、黒い瞳が光る。  
口には牙では無い牙が見え、口を開けると牙が無い。  
首は人と同じで、限りなく人に近い龍に変わった。

龍「俺の名は龍神。名の通り龍の神だ。」

スバツ

龍神は凄まじい速さでフランに突っ込む。

フ「？」

龍「ふんっ？」

ズガッ！！！！

フ「あう……！！！！」

かなり大きい拳がフランの腹を打ち抜く。

龍「もう一発！！！！」

グリッ

龍神は拳をそのままにひねりを加え、さらに打ち込む。すると……



ビシューオーーン!!!!!!!!!!

フランの身体からトルネードが突き抜ける。

フ「ぐふ…げは…」

フランはこの一撃で口から血を吐き出し、白目で倒れ、気絶する。  
その後も若干の痙攣を起こす。

龍「やり過ぎたか…」

シューオーーン

再び青い業火が身体を包む。  
すると…

龍「あれ？一体何が？」

龍神は記憶が無いようだ。

レ「・・・」

咲「お嬢様、もしかしてあれを知っていて…」

レ「いいえ、彼が力を持っていたのは知っていたけど…まさか龍だったなんて…しかもフランを一撃で…」

龍神の視点

龍「俺は一体何を……」

俺はあの瞬間から記憶が無い。  
攻撃してきたフランが気絶している時点で何かあった筈……

ガチャッ

レ「龍神。」

龍「お嬢様、いや、レミリア、一体何があったのか教えてくれ。」

レ「あなたは龍になったのよ。」

続く…

## 第2話 俺の力は龍の力？（後書き）

龍神だけに龍に変身。

でも力が半端ない。

次回は龍神の紹介をします。  
ではまた次回。

## 拳咲 龍神のプロフィール（前書き）

作者「さあ、今回は拳咲 龍神の紹介をしていきますよ。」

龍「あの〜、紹介すると言っても、特に何も無いんだけど…」

作者「なら創り出すまでだ。」

龍「と言う事で、今回は俺の紹介をするそうです。ではどうぞ。」

## 拳咲 龍神のプロフィール

拳咲 龍神 (けんざき りゅうじん)

年齢：15歳

性別：男

身長：170cm

体重：55kg

若干の筋肉質の身体で、少々痩せている。  
性格はおとなしめで、たまにはしゃぐ。

170の長身+アニメの主人公寄りのイケメン  
だけどモテない。

頭が非常に悪く、数学は常に0点。

五教科で100が限度。

一番得意なのは美術で、絵がとても上手い。

ちなみにまだ中学3年。

学校の服装はブレザー。

髪はストレートの長め。(全体的に)

友達がいない…

龍「…最後はダメ…」

作者「ゴメン…」

先祖が龍の神様であるらしい…  
友達がいなのはそのせいもあると…  
(龍は孤独を好む 数が少ないから の二つ)

龍神は龍に変身できる。

(本人に変身時の記憶が残らない)

龍になると声が低くなる。

(体が変化を起こすのが理由。)

龍の時は、アニメ 北 の拳の主人公、ケン ロウの低い声  
人間の時は声優のような声)

スペルカード (これから出てくるやつ)

裂拳「八裂」

破拳「バスターインパクト」

崩拳「粉碎の拳」

「龍拳」

スペルカード外 (これから出てくるやつ)

龍の一撃

龍の裂蹴



## 龍の怒り

作者「まあ、これからが多いですね。…え？　だったら物語が進んでからにしろ？　・・・  
無理ですね。まあ説明は早い方が良いじゃないですか。どちらにせよ、説明しなければ理解しきれない部分があるので。」

ではまた次回。

拳咲 龍神のプロフィール（後書き）

龍「結構適当じゃないか？作者さん。」

作者「失礼な！これでも頑張っている方なんですよ？」

龍「まあいいや…今回は俺が  
で大暴れ？するのかな？じゃあ、  
また。」

### 第3話 銀髪剣士 参上！（前書き）

この第3話タイトルでわかった人も多いと思います。  
なぜ行くのか…それは…

ではごきげん。

### 第3話 銀髪剣士 参上！

前回の俺は…

紅魔館で美鈴さんに助けてもらい、中にはいったらメイドの咲夜さんに会い、訳を説明したらお嬢様のとこへ行く事になり…

そしてそのお嬢様が妹と遊べと言い、出て来たのは赤い服の少女で、その少女はなんと吸血鬼！考える暇も無く連れていかれバトルするはめに…

だけど…

気がついたら少女は倒れていた。

俺は龍になっただけらしい…

龍「俺が…龍に？」

レ「ええ。」

龍「龍って言うと、あの…」

それよりも、何で俺は龍になった？

そう言えば4歳の頃、婆ちゃんが俺の先祖は龍神様とか言ってた気が…  
婆ちゃんはすごい霊能力者だったそうだし、もう居ないけど…  
その龍神様が、俺の体を借りて出てくるって事か？

龍「俺の…先祖…」

レ「龍神、あなた、良かったらここで執事として働かない？」

龍「…いや、ありがたいけど、俺はこの力を…力の意味を知りたい。」

レ「そう、残念だね。けど…」

龍「けど？」

レ「あなた体に流れる龍の血、少し味見させてもらってもいいかしら？」

龍「…ぎゃあああああ！！！！」

レミリアは舌なめずりをしながら近づくなか、俺の意識が…また…

ヴォーン!!!

龍「ウヲオオオオオオ!!!」

さて、血を吸われるのは俺もごめんだ。  
壁をブチ破るか…

天の視点

龍「破拳「バスターインパクト！」

龍神は拳を前に突き出し、壁に向ける。  
そして…

龍「ふんっ！！！！」

バオン！！！！

ズガーン！！！！

龍神の放った拳気が壁をブチ破る。

レ「？」

龍「じゃあな！」

スバツ

龍神は空いた壁に向かって飛びだした。

龍「ふゝ、久しぶりの空だ…そうだ、どれくらい高く飛べるかやってみるか。」

龍神はニヤリと笑いながら…



龍「そら？」

上へ物凄いスピードで飛ぶ。

龍「いいねえ久しぶりだ！この感触。」

龍神が飛び続けていると…

龍「ん？」

世界が変わり、長い階段が見えた。と…

ヴォーン！！！！

龍「…あれ？ここは？」

元の龍神に戻った。

龍「レミアアいないし…おかげで血を吸われずにすんだけど。」

龍神はホッとする。

龍「…何この階段？」

龍神は長い階段に気がつく。

龍「やめてよ…鬼畜過ぎるよ」の階段。」

凄く嫌がる龍神。と…

ヴォーン！！！！

龍「あれ？また？」

バアーーン！！！！

龍「…入れ替わりが激しいな…全く。」

龍神はため息をつく。

龍「さて、走るか！」

その言ひとや…

ビュオン！！！！！！！

龍神は一瞬で階段を登りきる。

龍「なんだ…もっとあるかと思っただぜ。」

? 「何者？」

龍神が振り向くと、そこには銀髪の少女が立っている。少女は二本の刀持っている。その内の一本を構える。

龍「ああ、ちょうど良かった。ここどこかおしえ」それ以上近づいたら、斬る! 「はい？」

少女は龍神を敵として見ている。

龍「誤解していないか？俺は単に「黙れ！バケモノ？幽々子様には指一本触れさせない？」ありゃ？」

少女は刀を抜き、龍神に斬りかかる。

龍「話しを聞け……」  
「龍の裂蹴！」

龍神は刀などお構いなしに、神速の蹴りをたくさん放つ。

ズバババババツ!!!

? 「蹴り? なら...」

「断命剣「冥想斬?」

少女は刀にオーラを纏わせ、刀を振る。

ガガガガガツ!!!

龍神の蹴りと少女の斬撃がぶつかる。  
そして...

ガキーン!!!

龍神の蹴りが少女の刀をはじく。

? 「くそっ!」

龍 「ふんっ!」

スバツ

龍神は少女の顔面に拳を放つ。  
そして寸止め…

? 「ひっ!」

龍 「話しを聞け…俺は単にここはどこか聞きたいだけだ。」



？「…ここは…冥界です。」

龍「じゃあこの屋敷は？」

？「白玉楼です。」

龍「お前は？」

？「私は魂魄 妖夢 (こんぱく ようむ) です。あなたは？」

龍神は拳を下げる。

龍「俺は拳咲 龍神…だ。」

妖「龍神ですか…名前通り、龍ですね。」

龍「本当はこの俺じゃない。」

ヴォーーン!!!

龍「本当は…」

妖「？」

龍「…あれ?…うわ!き、君は?」

妖「・・・」

妖夢は言葉を失う。

妖「あの〜…あなたは？」

龍「俺は拳咲　龍神。」

妖「なるほど…」

龍「え？」

少女説明中…

龍「龍になっちゃったか〜…記憶が残っていればな〜。」

妖「しかし、あなたは何故、龍になれるのですか？」

龍「よくわからないけど…俺の先祖が龍の神様だからだと思っ。」

妖「転生ですか…」

龍「多分ね。でも、ここに来る前は普通だったんだ。」

?「妖〜夢〜どこにいるの〜?大変よ〜!」

妖「幽々子様!」

龍「お詫びで何か手伝える事があればなんでもするよ!」

妖「では、是非お願いします!」

続く…

**第3話 銀髪剣士 参上！（後書き）**

はい、次回はアレですね。

そして龍神の龍の強さは半端ないですよ。  
ひよっとしたら…

ではまた次回。

#### 第4話 白玉楼の亡霊少女（前書き）

龍神の変身条件を考えました。

身の危険が迫ると変身。

強い拒絶を感じると変身。

怒りが頂点に達すると変身。

自分の意思で変身。

無条件で変身。

これくらいです。

ちなみに龍の強さは神以上なので、ただのパンチでも妖怪が瀕死状態になる程です。

自分で言うのもあれDeathが…まさしくチートDeathね。  
ではございませう。

## 第4話 白玉楼の亡霊少女

前回の俺は…

レミアに血を吸われそうになり、叫んでいたら…

そこから記憶が無い…

なぜか俺は超バカ長い階段の前に居た。

そこからまた記憶が…

でも変身する瞬間は残っている。あの時俺は青い炎に包まれていた。

そして気づいたら銀の髪 of 少女が居た。

彼女は俺と闘ったと言っていた。

彼女と話しをしていたら女性の声が出て…

妖「幽々子様！いかなされましたか？」

妖夢は声を張り上げ、心配をする。

？」「お腹が空き過ぎて死にそうよー！」「

妖「・・・」

龍「空腹かよ・・・」

女性はお腹を押さえて駄々っ子ように騒いでいる。

妖「少々お待ちを・・・」

龍「…あの〜、幽々子様…ですか？」

？「あら、あなたは？」

龍「拳咲 龍神です。」

？「龍神…良い名前ね。私は西行寺 幽々子



(わんぱく) (ゆめ) よ。」

龍「一つ聞いて良いですか？」

幽「何かしら？」

龍「その帽子の上に巻いている物は？」

幽「あゝこれ？これは私が亡霊だからよ。」

龍「亡霊？えっ！死んでんの？」

幽「ええ、そうよ。」

龍「…にしても透けてない。」

幽「温かいし、触る事もできるわよ。」

幽々子さんは手を差し出す。  
俺は触ってみる事にした。

龍「本当だ……」

幽「ね。…クンクン、良い匂い……」

妖「幽々子様、お食事ができました。」

幽「妖々夢々！もう、大好き？」

妖「ありがとうございます。」

幽々子さんはそう言うと、テーブルに置かれた食事をガツガツ食い始めた。  
相当腹が減ってたようだ。

龍「すごい食いつぶりだな…妖夢大変だろ。」

妖「いいえ、私はこの状態がいつまでも続けばいいなと、思っています。」

龍「へ〜。」

幽「あっ！龍神君、あなたも食べていったら？」

龍「えっ？いや〜でも…。」

幽「遠慮しないで。私はあなたに興味があるわ。それに、龍神君は妖夢を倒したそうじゃない。その実力、後で確かめさせてもらおうわ。」

龍「…え？」

幽々子さんは凄く真剣な目で俺を見る。  
俺と闘う？何を言っているんだ？俺は闘えない…  
まさか…俺の中の龍神と闘うのか？  
マジで何なんだよこの世界。  
もうウンザリだよ…

確かにそう思いたくなるのも無理ないかもな。だが…このまま此処にいるのも悪くないと思うが？

お前…誰だよ！

俺はお前だ。

正確には、お前の言う龍神様が俺だと言う事だ…

…お前が、俺のもう一つの姿…  
龍だったのか？

まあ、この世界に来てからだ、急に俺の力が強くなったんだ。だから俺はお前と入れ替わる事で、外に出る事ができる。

考えてみれば、お前はいつも俺のピンチで入れ替わってたけど…

たまたまだ…出ようと思えばいつでも出れる。ただ単にお前に死なれたら俺も困るからな。危ない時などに出ている。

お前の気分次第でもあるのか…

まあ、そうだな。  
今ちようどその時だ、どうする？

…俺の身体を使え。

よく言った。

龍「・・・」

幽「龍神君？」

妖「龍神さん？」

天の視点

龍神は立ち上がり、裸足で庭へ出る。

幽「・・・」

妖「まさか……」

龍「ふんっ！」

ヴォーン！！！！

龍「ウウウオオオオオ!!!」

ヴァー……!!!

龍「さあ、お望みの姿だ……」

幽「ウフフ……愉しめそうね。」

続く……



#### 第4話 白玉楼の亡霊少女（後書き）

はい、次回は戦闘ですね。

今回は話しだけになってしまいました。

いや、しかし寒いですね。

みなさんも身体には気をつけてください。

風邪気味の僕が言うのもあれですが…

ではまた次回。

## 第5話 咲き乱れる反魂蝶 と 龍の拳（前書き）

今回は幽々子との戦闘です。

龍神は弾幕を使わない（使えないわけではない）ので、肉弾戦のみになる一方、幽々子は弾幕を容赦無く放ってくるでしょう。射撃と格闘 どっちが勝つか？

まあ、結果は全て僕が握っていますが…

ではどうぞ。

## 第5話 咲き乱れる反魂蝶 と 龍の拳

前回の俺は…

幽々子とか言う女性が空腹で叫んでいた。

妖夢が料理を作り行ったので、暇にならないように会話を始める事にした。

その会話の中で俺は驚いた…

彼女はなんと亡霊だそうだ。

でも透けてないし、温かいし、触れる。

この世界は不思議だらけだ…

妖夢が料理を持って来たので、幽々子さんは食事をガツガツ食い始める。その中、幽々子さんは俺と闘うとか言う事を言い始める。

その時…

俺の頭の中で誰かの声が聞こえてきた。

もう一つの俺の姿、龍が話しかけてきた。

龍は俺と代わるかを聞く。

闘えない俺は龍に任せる事した。

龍「来い。」

幽「今行くわ。」

幽々子はそつ言つと浮遊しながら龍神に近づく。

龍「行くぞ！」

幽「ええ！」

ズバツ

龍神と幽々子は空高く飛び上がる。

幽「それ！」

幽々子は綺麗な弾幕を放つ。

龍「弾速が遅い！」

スバツ

龍神は弾幕を軽く避ける。

龍「そんなんで俺を倒せると思っつな。」

幽「そうね、なら……」

「亡舞 生者心滅の理 - 魔境 - !」

幽々子は弾幕を回転させながら大量に放つ。  
斜めからも大玉弾幕を連続で放つ。

龍「今度は密度があるな。」

スバツ スバツ

龍神は弾幕を避けると…

龍「だが、俺には無いに等しい。」

龍神は拳を握り、幽々子に向けて…

スバッ

神速で突っ込む。

シユン

幽「？」

龍「くらえ!!」

ブオン!!!!

幽「再迷 幻想郷の黄泉還り!!」

幽々子は龍神の下から弾幕が飛び出る。

龍「おっと。」

龍神は下の弾幕に気づき、後ろに下がる。

龍「なかなかやるな。」

幽「そつちも格闘だけで頑張るじゃない。」

龍「弾幕ほど俺に似合わない物は無い。俺はこの拳で闘う事が何より良い。」

幽「そう？でも、弾幕は時に美しく、時に強く、それが弾幕と言つ物よ。」



龍「お前、拳舞を知らないな？」

幽「拳舞？初めて聞くわ。」

龍「拳も弾幕と同じ、いや…弾幕より美しく、強い。お前にも見せてやろう。」

拳「と言つ名の芸術を。」

「行くぞ！」

「拳舞 桜満開！」

龍神は幽々子の目の前まで近づき、攻撃をする。

龍「ふんっ！」

ズガッ？

右で真つ直ぐ打ち込む。

幽「ううふ…！」

龍「そら！」

ドガッ！！！！

左の裏拳をぶつける。

幽「あぐ…！！」

龍「おおおらあああ…！！」

ズガン！！！！

龍神は回転するように幽々子を拳で打ち上げる。

龍「咲け！！！」

パァーン！！！！

龍神の拳の先から桜が飛び出る。

飛び出た桜は形作り、沢山の桜が咲き誇る一本の大樹となる。

幽「うづうづ……ぐんぐん……」

幽々子は苦しみ、後ろに倒れる。

龍「立て！まだやれるだろ。」

幽「女の人に対して厳しいのね…」

幽々子はふらつきながら立ち上がる。

龍「全力で来い！」

幽「いいの？」

龍「俺を誰だと思っている?」

幽「そうね…」

「反魂蝶 - 八分咲 - !!!」

幽々子の後ろに巨大な扇のような物が浮かぶ。

すると、幽々子は美しく、素晴らしい弾幕をレーザーと共に放つ。

弾幕と弾幕の間の隙間がかなり狭い。

それに弾幕は大量に放たれる。さらにレーザーは時間と共にどんどん狭くなるため、かなり避けるのが困難な技。

龍「それが全力か…」

「崩拳 粉碎の拳?」

龍神は拳を広げ、再び強く握ると…

龍「うっおおおおおー！ー！」

龍神は拳を前に突き出す。すると…

ブアーーン！ー！

龍神の拳から絶大な気が放たれる。

幽「？」

幽々子は驚く。  
絶大な気は弾幕やレーザーを消し飛ばしながら幽々子に向かって来る。そして…

ドアーーン！…！

幽々子に気が直撃。  
幽々子は凄まじい気をくらい、思いつ切り吹っ飛ぶ。

幽「きゃあああああ！…！」

龍「はぁっ…！」

スバッ

バッ

龍神は吹っ飛ぶ幽々子を神速で近づき、抱える。

幽「あ…ありがとう…」

龍「満足したか？」

幽「ええ…」

龍「じゃあな。」

ヴォーン!!!!

龍「…あゝ、大丈夫ですか？」

幽「うん。」



龍「え〜っとな〜その〜、どうしたら良いのでしょうか、この状況…」

龍神は幽々子をお姫様抱っこした状態に困惑する。

幽「少しこのままにさせて…」

龍「え！／＼／＼」

幽「お願い…」

幽々子はそう言いつと龍神にそっとな抱きつく。

龍「／／／／／…」

幽「zzz…」

幽々子はそのまま寝てしまった。  
龍神はその後、白玉楼まで抱えて戻った。

続く…

**第5話 咲き乱れる反魂蝶 と 龍の拳（後書き）**

次回は博麗神社です。

そろそろ龍神の能力を決めようと思っています。

ではまた次回。

## 第6話 博麗神社へ御参り（前書き）

今回は博麗神社へ行きます。

龍神の能力は最後に決めますので…

ではごっご。

## 第6話 博麗神社へ御参り

前回の俺は…

俺の中の龍が幽々子さんと戦うことになった。

記憶が無い筈が、しっかりと俺の頭の中に残っている…

凄まじい戦いだった。見ていた弾幕は全て美しかった。

そして、戦いは龍の勝ち。龍は幽々子さんを抱えたまま俺に戻しやがった。

女の人をあんなに近くで見た事ないのに…

さらに幽々子さんは俺に抱きつくから…

もう大変だった。だけど幽々子さんは眠たかっただけのようだ。

龍「妖夢！」

俺は幽々子さんを抱え、白玉楼に戻る。

妖「あつ！幽々子様！」

妖夢が幽々子さんを見て、慌てて出て来た。

龍「ゴメンな…ちょっとやり過ぎちゃって…」

妖「良いんですよ、幽々子さんが無事ならば。」

龍「…あく龍が、力は最小限に抑えた　って言っている。」

妖「龍？」

龍「もう一つの俺の姿を　龍　って呼ぶ事にした。あいつと俺はテレパシーみたいな物ができるんだよ。」

妖「テレパシー？」

龍「…その…以心伝心みたいな事。」

妖「ああ、なる程ですね。」

龍「あ…その、ここから下の世界に戻るにはどうすれば…」

妖「それでしたら、あの階段を降り続けてください。そうしたら戻れます。」

龍「えっ…あの階段…」

ヴォーン！！！！

龍「あつ、助かった。じゃあな！妖夢！」

妖「あつ…はい。」

龍「じゃあな。」

スバッ

俺こと龍は神速で階段を降りて行った。

フッ

龍「外に出たか。」

青空が俺の目の前に広がる。  
なんて気持ちが良いんだ…

ふっ…お前も、空の良さがわかったようだな。



龍、お前…

さあて、どこ行くかな。  
おっ、あそこにしよう。

龍は急降下してその場所に降り立った。

ヴォーン!!!

龍「ここは…神社？」

俺は神社の中へ入る。

龍「…おっ。」

俺は寺の前の賽銭箱に目をつけた。

龍「小銭あったかな……あった！」

俺はちょうどポケットに入ってた10円を取り出す。

龍「それ！」

チャリン

パン パン

龍「早く元の世界に戻れますように。」

俺は手を合わせ、願いを言う。

？「やめときな、その神社に神様はいないぜ。」

突然俺の後ろから男口調の少女の声が聞こえる。

龍「えっ？」

俺は神様などに驚きながら、振り向く。

？「その神社には紅白の貧乏巫女が居るだけだぜ。」

龍「あの…誰？」

？「私は霧雨　魔理沙　（きりさめ　まりさ）　だぜ。」

龍「どうも、拳咲　龍神です。」

魔「初対面の相手に対して敬語とは、お前偉いなあ。」

龍「いえいえ、あっ、それより、貧乏巫女って何ですか？」

魔「丁度良い、お〜い！霊夢！遊びに来たぜ！」

魔理沙さんはお寺の裏庭に周り、誰かの名前を呼ぶ。

ちなみに、なぜ少女に敬語を使うのか…

レミリアはお嬢様なのに背が小さかった。

だから小さい人はなんとなく偉い人が多いのかな〜、と言う事。

？「何よ〜、私は今お茶を飲むので忙しいんだから！」

お茶に忙しいもクソもあるのか？  
言い逃れにしか聞こえない。

魔「こつちだぜ。」

龍「えっ？」

魔理沙さんは俺の手を掴み、お寺の裏庭まで走る。

魔「ほら、見てみる。」

龍「ん？」

俺の視線には確かに紅白の服を着た少女がいる。  
服のセンスがおかしいと言いたい。  
なにせ腋出ちゃってるし。

？「魔理沙、この人誰？」

魔「格好を見てわかるだろ？外来人だ。」

龍「あゝ、拳咲　龍神です。」

？「で、何の用？」

龍「用と言うか…たまたま通りがかったただけなんです…」

？「ここは博麗神社、外来人なら元の世界に戻す事も可能よ。」

龍「元の…世界に…戻れるんですか？俺…」

？「ええ、あなたが常識の人間なら…」

龍「どう言う事ですか？」

？「あなたが能力を身につけていなければ…」

能力…強いて言えば龍になれる事だけど、これが条件なら言わない  
ほうが…

嘘はいけねえよ。

ヴォーン！！！！

龍「うわ！」

？「何？」

魔「何だこれ…」



ヴァーーン!!!

龍「フウウオオオオ！」

何で突然変わるんだよ！

嘘はダメだと言っているだけだ。

？「あなたは…」

龍「俺は龍神の中の龍。」

魔「龍神…」

龍「これでは帰れないのか？」

？「…ええ。」

龍「理由を述べてもらおうか。後、お前の名前もな。」

？「私は博麗　　霊夢…」

龍「じゃあ霊夢、俺が帰れない理由は何だ？」

霊「それはあなたの存在自体が理由よ。」

龍「ほう…それで？」

霊「あなたは龍に変わった。能力が無くても帰す事はならない。外の世界と幻想郷を隔てているのは 常識と幻想の結界 と、私が管理する 博麗大結界 。あなたを外に帰すと結界がバランスを崩して崩壊するわ。」

龍「結界ねえ。」

靈「この幻想郷を壊さない為にも、あなたを帰す事はできない。」

どうする？お前が無理にでも帰りたいなら、俺はこいつに言う事を聞かせる事もできるが、こいつらがどうなるかはお前次第だ。

……くそ……くそ、くそ！

ここに残る……

よく言った……

龍「なら仕方がない…気は進まないが、ここに残ってやるよ。」

霊「ありがとう…」

魔「龍神、お前…」

ヴォーーン!!!

龍「良いんだ…どうせ帰ったって頭悪いから…将来だって、お先真っ暗だし…友達も…いない…し…」

ポタ

龍「？」

何だこれ…もしかして涙？何を泣いているんだよ…あっちに帰ったって俺はなにもできないじゃないか。

ドサ

龍「う…く…く…はぁ…く…」

俺は膝間付く。

くそ！涙が…何で止まらないんだ！…止まれよ！…止まってくれよ？頼むから…

ボタボタ

龍「う…ぐ…ぐ…う…ふ…ぐ…ぐ…」

霊「龍神…」

魔「龍神……」

龍「うあああああ……！」

続く……

## 第6話 博麗神社へ御参り（後書き）

龍神の能力は

（自然に存在する龍を操る程度の能力）です。

火、水、氷、雷、風、土を操る能力です。

龍と、 以上の字をプラスするとわかります。

次回はあの金髪の女性と龍神が会います。

後、感想をお願いします。

ではまた次回。

## 第7話 俺を落とした主犯（前書き）

さて、能力は見て頂けたでしょうか。

本当はもっと属性の種類を増やしたかったんですけどよね…  
今回は例の金髪の女性に出会う話です。

ではございませぬ。



## 第7話 俺を落とした主犯

前回の俺は…

白玉楼を離れ、空から見つけた神社に降り立つ。

折角なので、お賽銭をいれ、願い事を言った時に、後ろから声がした。

振り向くと、白黒の服を着た金髪の少女がいた。この神社には神様がいないとか…

名前は霧雨 魔理沙。

魔理沙は貧乏巫女とか言うので、聞いたら…

突然誰か名前を呼び、俺を引っ張って行った。

そしたらまた少女が居た。

この娘の服はおかしい…

紅白だし、腋を出すとか、今時のギャルでもやんねえよ。

紅白少女は俺を元の世界に帰せると言う。

常識なら…と…

言わない方が良いと思ったけど、龍が突然出て来やがった。龍は帰れない理由を聞いたら、俺を元の世界に帰すと結界が崩れて、幻想郷が無くなると…

仕方なく…残る事にしたが…

俺は…哀しみに包まれた。

龍「……」

あれから1時間は経つ。  
俺はまだ喋る気力が湧かない。

魔「なあ〜元気だせよ〜、幻想郷も結構良い所だぜ。」

龍「……」

魔「龍神が一生懸命に俺を励ますが、俺は何も言わない。言いたくない……」

魔「龍神〜うつ向いてないで笑えって。」

龍「……」

魔「…あゝ、その〴〵何だ…お前の能力は龍になれる事だ。そういな  
いぜ？その能力は。お前はある意味、運命によって幻想郷に来たん  
だよ。」

龍「…運命？」

魔「…多分な。」

龍「…運命なら…仕方ない…でも…」

魔「？」

龍「俺が現実世界に居たあの時、俺は金髪の女性を見た…あれは…」

魔「金髪？もしかして、胡散臭かったか？」

龍「そこまではないけど、確かに不思議な感じだった。日傘をさ  
していたから…」

魔「…確定だ…」

龍「え？」

魔「霊夢！ちよつと来てくれ！」

魔理沙は霊夢を呼んだ。

霊「何？魔理沙。」

魔「霊夢、龍神を幻想郷に連れて来たのはもしかすると…紫かも知れねえぜ。」

霊「…あり得るわね。」

龍「？」

霊「龍神、今から紫の所に行くわよ。」

龍「紫？」

霊「ええ、あなた紫の家知らないだろうから、一緒に行ってあげる。」

龍「あ…ありがとう。」

霊「後、あなたの能力、

(自然に存在する龍を操る程度の能力) よ。  
この能力は自然に属する龍の力を操れる能力。火、水、氷、雷、風、土、後色々。」

龍「能力…」

霊「行くわよ。」

龍「あつ俺飛べない…」

ヴォーーン!!!

龍「それがあつた…」

龍「さて、行こうぜ。」

霊「ええ。」

俺は霊夢に付いて行き、紫とか言う人の家を目指した。

霊「・・・」

龍「何だよ。」

霊「翼で飛ばないつえにここまで人に近い龍なんて知らないから。  
龍自体見た事無いけど……」

龍「元は胴長龍だったからな。翼なんて初めから無い。人間に近いのはこいつの身体を借りているからだ。」

霊「ふうん…あつ、こじよ。」

霊夢は小さい屋敷を指差す。  
そしてそこに降りる事に…

スタツ

ヴォーン!!!

龍「こじか…」

霊「付いて来て。」

俺は霊夢の後を付いて行く。  
紫って人は一体どんな人なのだろう。

スー

龍「？」

突然後ろから気配を感じたので振り返ると…

？「ウフフ…」

龍「…へ？」

霊「紫、どこから出て来てるの？」



？「いらっしゃい、霊夢、龍神君。」

龍「何で俺の名前を…」

？「あなたをここに連れて来たのはこの私だからよ。」

龍「・・・」

霊「やっぱり」

ヴォーン！…！

龍「お前が…」

ヴァー…！…！

龍「犯人か…」

天の視点

龍神は腹の底から溢れる怒りを抑え切れず、龍になる。

龍「俺をこの世界に連れて来た理由を教えてくださいませんか…」

話しの内容からすると龍ではなく、龍の姿をした龍神のようだ。

龍は幻想郷に来た時に現れた存在。

龍神は連れて来られた。

怒りが龍の意識を乗っ取ったようだ。

紫「あら、そんな力があつたの？ 凄いわね。」

ズガン！！！！

龍「質問に答える…」

龍神は紫の態度に腹が立ち、地面を蹴る。  
蹴った事で小さいクレーターができた。

紫「そう怒らないで頂戴。あなたがあつちの世界に嫌気をさして  
いたようだから連れて来たのよ？」

龍「だから…森の中に落とすやがって…危つく俺は死ぬところだっ  
た！」

紫「ウフフ、ゴメンなさい。ついね。」

龍「つい…だと…!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

龍神の怒りは大地を揺るがす。

龍の神だから当然だが…

ズガーーーン!!!!

凄まじ過ぎる。

地面が割れ、浮き上がる。

おまけに怒りのあまり龍神の目は真っ赤に染まり、本来口の中には  
牙が無い筈が、鋭い牙が生え、口から見える程。

霊「龍神！落ち着いて！」

龍「てめえは黙ってる？」

ズバーーン！！！！

龍神の言葉が咆哮となり、霊夢を吹き飛ばす。

霊「きゃああああ！！！！」

龍「てめえの名前は何だ！」

紫「私は八雲　紫（やくも　ゆかり）。」

龍「てめえを倒す……」

ズギャーーン!!!!

龍「ある意味、帰れないのはお前の所為だからな……」

紫「龍の神と戦うとは……身から出たサビね……」

紫はそう言いつと……

紫「式符「橙」 式符「八雲 藍！」

紫の前に少女と女性が現れる。

? 「にゃ！」

? 「ふん。」

少女は帽子を被って猫耳をつけている。

服は中国の服だ。

女性も帽子を被っていて、紫と同じ金髪だが、ショートヘアだ。服は紫に似たような物で、袖と袖を合わせている。

紫「紹介するわ、橙（ちえん）と藍（らん）よ。」

橙「にゃ、私は橙ですにゃ。」

藍「私は藍だ。龍：本当に存在したのか。」

龍「会話は終了だ……」

「覚悟しろ……」

続く……



第7話 俺を落とした主犯（後書き）

怒りに震える龍神は紫を倒す事にする。

次回は橙、藍、紫の三人が龍神によって…

ではまた次回。

第8話 許せない理由…（前書き）

龍神は怒りを爆発させ、紫を倒す事に…  
許せない理由…それがあから…

ではどうぞ。

## 第8話 許せない理由…

前回の俺は…

霊夢の言った紫と言う人に会いに行く事になった。

俺は飛べないので、龍に任せ、向かう事に…

しばらく飛んでいると、屋敷が見え、そこに降りる。

ちなみに俺が龍になった時の記憶が残るようになった。一部始終全て。

降りて元に戻った所で、後ろから声がした。

驚いて振り向くと、見た事のある金髪の女性が居た。

女性は俺の名前を知っていた…なぜ知っているのか聞くと、俺を幻想郷に落としたから…と…

その言葉と共に俺の怒りが溢れ出す。

俺は龍になり、なぜ連れて来たのか聞くと…

俺が嫌気を差していたからだ…

確かに嫌だったが、わざわざこんな所に連れて来る必要があるか？森であんな目にもあった…それなのに…つい…だと！

笑う姿にさらに腹が立った！

帰れないのはあいつの所為でもある。

だから倒す！

龍「行くぞ？」

スバツ

龍神は音速で橙と藍に近づく。

橙「うにゃ？」

藍「何？」

橙と藍は一瞬で龍神が目の前に現れた事に驚く。

龍「邪魔だ…」  
「龍の一撃！」

龍神は拳で力一杯橙と藍の腹を殴る。

ズガッ！！！！

橙「にゃう……！！！！」

藍「ぐふ……！！！！」

龍「おら……！！！！」

グリッ

龍神は拳をひねり、力をさらに加える。

ビシューオーン……！！！！

橙と藍の背中から凄まじいトルネードが突き抜ける。

橙「……………!!!!」

藍「……………!!!!」

橙と藍は血を吐き出しながら白目を向き、そのまま前に倒れる。

アサシ

龍「お前等と遊んでる暇は無い……」

龍神は真っ赤な瞳で倒れた橙と藍を見下ろす。

紫「強い…」

龍「さあ、次はお前だ…」

龍神はゆっくりと紫に近づく。

紫「魔眼「ラプラスの魔」！」

紫は周囲に不気味な眼を出現させる。

龍「？」

龍神は周囲の眼を睨む。  
すると、不気味な眼は長細いレーザーを放つ。

龍「消える……」  
「龍の怒り！」

ズギャアーーーーン!!!!!!!!!!

龍神は全身から怒りの気を放つ。



ドギヤーン……!

眼は放たれた気によって消える。

龍「さあ、どうする？こっから先は一方通行だ…逃げも隠れもできない…」

龍神は怒りに満ちたその眼で睨む。

紫「……」

紫はただ黙って龍神を見る。

龍「歯を食いしばれ！」

龍神が拳を強く握ると…

!!!

何故だ？何故動かない？

もうそこまですておけ…  
あいつも反省している筈だ。

龍！お前には関係無い？これは俺の問題だ！

関係無いわけ無い。俺がお前の中で目覚めた時から俺とお前は一緒なんだ！

なんだと？

俺はお前でお前は俺：お前のやった事は俺のやった事。つまり片付けるのも俺の仕事であり、お前のやる事でもある。

・  
・  
・

あいつを…許してやれるか？

…ふっ…

許す…

よく言った。

龍「許す。」

紫「？」

龍「許すと言っただ。」

紫「え？」

龍「もういい…気が済んだ…」

龍はそのまま飛び去った。

続く…

**第8話 許せない理由：（後書き）**

さて、今回も龍の説得で収まりました。  
次回は未定です。

ではまた次回。

第9話 神様の居る神社（前書き）

今回はあの後です。

タイトルでわかる人もいるかな？

ではごっご。

## 第9話 神様の居る神社

前回の俺は…

紫にム力つき、倒す事にした。

紫が何やら式神を出したので、ぶん殴って気絶させた。

血を吐いてたがどうでもいい。俺は紫を倒す。

抵抗なのか、技を発動してきた。

うざったいので、簡単に技を崩してやった。

これで気が済むまでボロボロのスタスタにしてやれる。そう思い、

拳を握り、紫を殴ろうとした時…

腕が動かなくなった。

何があったのか、その時、龍が話しかけて来た。

龍が俺を説得し、俺は紫を許してやる事にした。

俺は博麗神社に向かって飛んだ。

龍「……はっきり言う。ウンザリだ……」

何でだ？



龍「…いやなんだよ…俺も、あいつらも、この全てが…」

…くん…何とも言えないな…お前は元の世界に帰りたいのか？帰っても何も無いからと言ったのはお前だろ？

龍「…そうだが。」

頭も悪いし、友達もいない。そんなお前が何故帰りたがる。

龍「お前は一体何を言いたい？」

単刀直入に言おう……諦める。

龍「諦める？お前に言われる筋合いは無いな！……！」

ならぶじつする？

龍「このまま自殺してやる。」

やれるものならやってみる。

龍「何だと？」

俺は龍の一言にムカつき、急降下をする。

この身体は俺の身体だ。  
お前程度に操れると思うな…

龍は俺の妨害をする。

龍「うわっ！…くそ！…！」

俺は龍の妨害を防ぐため、乱れ動く。

それで防いだつもりか？俺も舐められたもんだ…

ギョーン！…！

龍「ぐあっ？……じじっ…」

龍はさらに妨害をする。俺は抵抗するが、力が強すぎる…  
気がつくとも目の前に地面が…



？「人？何でここに…そんな事より、助けなきゃ…」

龍「……？」

龍神は目を覚ます。

龍「ここは…一体…」

？「お目覚めですか？」

龍「？…へ？誰？」

龍神の目の前には、緑髪の少女がいた。  
少女はとても優しい眼差しをしている。

龍「もしかして…助けくれたんですか？」

？「あ、はい、とても大きい音がしたので、調べに行ったら、あなたが崩れた地面に横たわっていたので。」

龍「…ありがとうございます。そのく、何て言ったら…」

？「お礼なんてされる程の事じゃありませんよ。それより、お身体の方は大丈夫ですか？崩れた地面に倒れていたから、大怪我でもしているのかと…」

龍「怪我なら大丈夫です。こつ見えて、結構丈夫なんで。」

？「そうですね。あ、自己紹介まだでしたね。私は東風谷 早苗  
(こちや さなえ) です。」

龍「俺は拳咲 龍神です。」

早苗「龍神…良い名前ですね。」

龍「名前を褒められるなんて、初めてだ。」

早苗「そうなんですか？私は結構良い名前だと思いますよ。」

龍「ありがとうございます。…失礼ですが…何歳なんですか？」

早苗「16歳です。」

龍「16…俺より歳上？」

早苗「あなたは何歳なんですか？」

龍「15歳です。」



早苗「もしかして、中学生ですか？」

龍「はい…て、何で中学生と言う単語を？」

早苗「私も元はあなたと同じ外来人なんです。」

龍「マジで？」

早苗「ちなみに私は高校生です。」

龍「やっぱり。」

早苗「だけど背は負けちゃってますね。」

龍「そうですね？ちょっと立ってみてください。」

俺は早苗さんを立たせる。

龍「本当だ。」

早苗「ね。」

立ってみると、意外に早苗さんの身長が低い。  
俺と早苗さんの身長差は10cmもある。

龍「その格好はもしかして、巫女？」

早苗「そうです。」

龍（霊夢みたいに腋だしちゃってるよ……。腋だし流行っているのかな？）

「そう言えば、「こ」は？」

早苗「ここは「ここは守矢神社さ。」神奈子様。」

突然早苗さんの後ろに現れた赤紫髪の女性が現れた。  
女性はあぐらで浮遊しているうえに背中後ろに何かの輪っかがあ  
る。

早苗「紹介します、八坂 神奈子 (やさか かなこ) 様で  
す。神様なんですよ。」

龍「かかかかか、神様？」

神「そこまで驚かなくても良いだろ。神の一人や二人くらい普通に  
居るぞ。」

龍「だから有り得ないんだよここは……」

？「少年よ、心を広く持て。」

龍「？」

俺は声の方向を向くと…

龍「どなた？」

？「私は洩矢 諏訪子（もりや すわこ）。少年よ、君の名は？」

龍「拳咲 龍神です。早苗さん、知っている娘？」

早苗「諏訪子様も神様なんです。」

龍「……わかりました。神様ばかりですね。ちょっと失礼します。」

「

早苗「どうぞ。」

龍「……………」

「どうなってるんだよマジで〜〜〜!!!」

「スッキリしました。」

早苗・神・諏訪「……………いいえ……」

龍「んで、二人はどんな神様なんですか？」

神「私は風の神。今は山の神だ。」

諏訪「私は土の神。土着神で言うんだよ。」

神「早苗も神と言えば神だ。」

龍「もう、慣れました……」

早苗「私は現人神（あらひとがみ）です。」

諏訪「現人神と言うのはね、神様の生まれ変わりで、生まれながらにして神様と同じ扱いなんだよ。」

龍「世の中知らない事ばかりですね…」

じゃあ、そろそろでるか…

ヴォーン！！！

龍「あ…やべ…来ちゃった…」

早苗「えっ？何がですか？」

龍「わけはこいつから聞いて…」

ヴァーーン!!!

早苗「どうしたんですか？」

神「早苗、下がるんだ。」

諏訪「この少年はどんな力を持っているかな？」

龍「少年じゃない、俺は龍神…名の通り、龍の神だ。」

早苗「龍神さん？」

龍「たしか、神の最高位は龍だ。俺はその龍の神、龍神。お前達の事はこいつの中から聞いた。その実力、確かめさせてもらおうか。」

神「龍の神、文屋の情報もあながち嘘では無いな。」

諏訪「空飛ぶ青い妖怪！なぐんで載ってるんだもん、まさかそれが君だったなんて。」

龍「悪いが、俺は拳咲　龍神じゃない、龍神だ。」

龍はそう言つと、障子を開け、外に出る。

龍「来い。風の神　神奈子、土の神　諏訪子。」

神「今は山の神だと言つてるだろ。」

神奈子は龍に向かって飛んで行き、何処からか柱を飛ばす。

ガシッ



龍「そんな攻撃で俺は倒れん。」

龍は柱を手で受け止める。

龍「さて…」

「能力を試してみるか。」

続く…

第9話 神様の居る神社（後書き）

二人の神様と龍は闘う事に…  
神と龍神はどっちが強いか…

ではまた次回。

第10話 伝説の生き物、神の最高位、龍、(前書き)

さてさて、風の神&土の神VS龍の神：

勝負はどちらに…

ではでは。

第10話 伝説の生き物、神の最高位「龍」

前回の俺は…

龍に諦めるだの言いやがるから自殺でもしようと考えた！

けど…考えてみれば、こいつは龍の神で超絶強い…

自殺しようとしても死にきれない。

龍と争ってたら地面が目の前に…

俺は地面と激突、気を失った。

気がついたら…

俺は家の中に居た。

看病してくれたのは東風谷 早苗さん。

緑色の髪をしていて、心は髪色と同じ広く優しい自然のような人だ。

こんな美人は俺の世界にはいなかったな…

と、突然誰かの声が…

紫髪の女性… 神様と言っていた。

そしてまた金髪の幼女が現れた。

彼女も神様だとか…

さらには早苗さんまで現人神と言う神様だと…

その時龍が突然出てきた。おそらく神様と言うのに喰い付いたのだらう。

また戦闘とは…

龍「行くぜ、これが龍の力だ！」

「爆ぜよ！風龍！」

ビュオーー！！！！！

龍が腕を払うと、突風が吹き荒れ、龍の目の前には風でできた巨大な龍が現れた。

龍「さあ来い神奈子！お前の力を見せてみる！」

神「…ッ！」

神奈子は御柱を複数放つ。

龍「放て！その身の真空の刃を！」

ビュオン!!!

シパパパパーン!!!

風龍は無数の真空の刃へと姿を変え、御柱を細かく切り裂く。

神「何？」

龍「その程度か？」

神「くそっ！」

「神祭「エクスパンデッドオンバシラ！」

神奈子は背中に御柱を構え、無数の御柱を放つ。

龍「拳で十分だな。」

「オラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

ドバババババババツ!!!

龍はジ　ジ　並の声を張り上げながら拳の嵐を繰り出す。

ガガガガガガカッ!!!

龍の拳の嵐で御柱は粉々に碎け散る。

龍「んじゃ…手加減してやるよ。」

「裂拳「八裂」

スバツ

神「!？」

龍は一瞬で神奈子に近づき、  
正拳、裏拳、肘打ち、膝蹴り、  
回し蹴り、をランダムに物凄い速さ  
で打ち込む。

ズガガガガガガッ!!!!

神「ぶふお…ッ!！」

龍「ふんっ!！」



龍はサマーソルトキックで神奈子を蹴り上げる。

龍「はあああああああああ！！！！」

ズガン！！！！

龍は蹴り上げた神奈子に回転かかと落としを叩き込む。

神「……ッ！！！！」

神奈子はかなりの速さで真っ直ぐに落ちて行き、地面に激突した。

ズガン！！！！

神「うぐ……」

龍「神奈子、本気出してみろ！」

神奈子は隙を見て龍の後ろに巨大な御柱を向ける。

神「なら……見せてやる！」

龍「！？」

ズオン



神「……!!!」

諏訪「神奈子、私も手伝おっか？」

神「諏訪子、すまない。」

龍「二人揃ったか。来い！本気でな。」

神「神符「水眼の如き美しき源泉！」

諏訪「開宴「二拝二拍一拝！」

神奈子は全体に弾幕を隙間無く無数に放つ。

諏訪子は細いレーザーを狭めるように放ち、さらに弾幕の集まりが突然現れ、龍に向かって飛んで行く。

龍「さすがに弾幕に飽きてきたな。」

龍は残像を残しながら弾幕を避け、諏訪子に近づく。

諏訪「はっ！速い！！」

龍「ちゃんと耐えろよ。」

「龍の一撃！」

ズガン！！！！

龍は拳を諏訪子の小さい腹に打ち込む。

諏訪「うう…ッ！」

龍「まだ終わらないぜ！」

グリッ

龍は拳を捻り、さらに力を加える。

ビシューオーーン！！！！

諏訪子背中からトルネードが突き抜ける。

諏訪「……あ…ぐぶっ…！！！」

諏訪子は辛うじて耐えたが、ダメージが酷くデカイ。

神「諏訪子！くそ！！」

「マウンテン・オブ・フェイス！！！」

神奈子は弾幕で花の様な形を何重も作り、そして形を崩して弾幕として放つ。そして放ったと同時に弾幕で形を作り、崩して放つ。

龍「崩してやるよ。」

「破拳「バスターインパクト！」

龍は拳を握り、前に突き出し、力を込める。

バオーン!!!

放たれた拳気が弾幕を消し飛ばす。

神「何？」

龍「死ぬなよ？」

「崩拳「粉碎の拳！」

龍は神奈子に一瞬で近づき、拳を神奈子の腹に打ち込む。  
すると…

ズガッ!!!



ボガアーーーーン!!!!

バアーーーーン!!!!!!

想像を絶する拳気が神奈子を貫く。

その所為なのか、後ろのしめ縄が弾ける。

しめ縄が弾けた瞬間…

神「ぶはあッ!!!!」

神奈子は思いつ切り吐血をした。

吐血をした後、そのまま力尽きるように落下するが…

龍「おっと。」

龍が直前で抱える。

龍「……生きているか。手加減したとはいえ、殺しかねないな。」

龍はそう言い、ゆっくりと降りた。

早苗「龍神さん……神奈子様は……」

龍「心配するな、辛うじて生きてる。」  
「水龍よ、その身の恵みを与えたたまえ。」

バシャバシャ…

バシャーーン！！！！

空気中の水分が収束し、巨大な水の龍が現れた。

龍「早苗、諏訪子も連れて来い。」

早苗「あつ、はい！」

早苗は座り込んでる諏訪子を抱えてきた。

諏訪「あゝうゝ…お腹が痛いよゝ…」

早苗「少し我慢してくださいね。」

龍「降らせ！恵みの雨！」

龍がそう言つと、水龍が手を龍達の上に翳し、雨を降らせる。

サー……

神「……うう……生き……てる……」

諏訪「あっ！もうお腹痛く無い！」

龍「これで良し。」

早苗「龍神さん……そう言えばその姿なんですけど……」

龍「説明は後だ、とりあえず運ぶぞ。」

早苗「はい。」

続く…

第10話 伝説の生き物、神の最高位  
龍（後書き）

はあ…

疲れた…

龍が勝ちましたね。

ではまた次回。

第11話 神社へお泊り（前書き）

前回龍が勝つてからその後、

容姿の説明をする事に…

それ以外も？

ではどうぞ。

## 第11話 神社へお泊り

前回の俺は…

神奈子さんと諏訪子さんと闘っていた。

まずは神奈子さん…

何か柱飛ばして来るからビビった…

あれは？何だ？

しかも攻撃した後、柱じゃない程の大きさの柱が現れた…

どんな攻撃っすか？

その後諏訪子さんも入って来た。

二人は弾幕を撃って来るが、龍は簡単に避け、諏訪子さんの腹を…

溝落ち入っちゃったかな…

そんな心配を知らずにすぐさま神奈子さんへと攻撃を戻す龍。

もうやめて！と言いたい所の腹部拳打。

あり得ない量の血を吐いたのは神奈子さん…

だけど龍はその後、ちゃんと能力で神奈子さんと諏訪子さんを治し

た。

すると、早苗さんがこの姿の事を聞きたいと… 龍は説明をするよ

うだ。

龍「さて、この姿についてだが…」

早苗「はい。」



龍「元々、俺はこいつの中で同じ時を過ごして居た。本来は生まれ変わりと言うだけで何も無かった。」

「だが、ここ幻想郷に連れて来られてから、俺は自我を持ち、こいつの中で目覚めた。」

姿が変わるのは俺自身が望んで行く。それ以外はこいつの怒りで変わるくらいだ。」

早苗「そうなんですか。」

ヴォーン!!!

龍「まあ、そんなところです。あつ、そろそろ日が暮れるので、僕はこれで……」

早苗「あの……!」

龍「……はい。」

早苗「もし……良かったら、泊まって行きませんか?」

龍「へっ?」

早苗「どこか、泊まるところが無ければ…」

龍「えっ? 良いんですか?」

早苗「はい。」

龍「…じゃあ…お言葉に甘えて…」

つい嬉しくて泊まる事に…

しかし、良いのだろうか…

俺はまだ厨三だが、一用の思春期男子だぞ?

幼女神様に美女神様。

さらには美少女神様まで…

何だよ…みんな神様じゃねえか…

神様に変な事したらヒドい祟りに遭いそうだ…

そうならない為にもハーレム気分を捨て去って、周りは凄い神様な

んだ と言つのを自分に言い聞かせよう。

とりあえず、今晚は守矢神社で一夜を過ごす事に…

早苗「さあ、召し上がれ！」

凄く張り切り切りました具合に笑顔を見せる早苗さん。  
確かに凄い晩ご飯だ…

炒め物、揚げ物、焼き物、蒸し物、煮物と言ったかなりの数の皿が  
ズラリと並べられた。

こんなに食べられないよ…

と言っても、あの早苗さんが作った料理だ。  
残さず食べなきゃ悪い。

とりあえず、箸をとり、炒め物から…

パク

もぐもぐ…

龍「何だこれ…うま過ぎる…!!」

高校生なのにこんなに料理が上手なのか…  
美少女だと料理も美味になるんだな。

神「当たり前だ。早苗の作る料理は全部美味い。」

諏訪「凄い食いつぶりだね！良かったね早苗！凄く喜んでるよ！」

早苗「まだまだたくさんあるのでいっぱい食べてくださいね！」

龍「はい！」

俺が幻想郷に来てから初めてか…  
こんなに美味しい食べ物。  
俺はこの時初めて嬉し涙を流しそうになった。

諏訪「？早苗？」

早苗「…／／あつ、えっ？何ですか？」

諏訪「あゝ、早苗もしかして…」

早苗「ええっ？ちつ違いますよ！私は彼の事何か！」

諏訪「えっ？私何も言っただけよ？彼誰の事？（ニヤニヤ…）」

早苗「そそそれは…」

龍「？」

早苗「何でもありません！」

早苗さんは何故か顔を真っ赤にし、どこかへ行ってしまった。  
けど、何で顔を赤くしてたんだ？  
夢中で食べていた俺にはさっぱりであった。

食べ終わった俺はそのまま諏訪子さんに部屋まで案内された。

就寝前…

お風呂に入った後、部屋で布団を敷いた。  
その後、少し考えた…

そう言えば、神奈子さんの名前は 八坂 神奈子で、諏訪子さん  
は洩矢 諏訪子だったな…

何か思い出しそう…

あっ！そうだ！長野県に諏訪神社つてのがあったな。それに修学旅行で行った京都に八坂神社があった。

もしかしてあっちの神様なんじゃねえか？

何で幻想郷こゝろに居るの？

ヤバいじゃん、諏訪神社も八坂神社も神様居ないじゃん！

……まあいいや。

どちらにしても元から神社に神様居るなんて信じて無いし…

あれ？そう言えば龍出て来てないな…

おい！龍！

・  
・  
・

龍！！

・  
・  
・

ちっ、無視かよ…  
じゃあもう寝るか。

そうして俺は、布団に入った…

就寝後…

サササッ

龍「ZZZ…」

サササッ



龍「ZZZ…」

サササッ

龍「？」

ふと俺は目を覚ました。  
誰かの足音が聞こえる。  
一体だれだ？  
足音が近い…  
寝たふりをしよう…

龍「・・・」



(この間僅か、0.00001秒)

俺が刹那に思考を巡らせると…

早苗「あの…起きちゃいましたか？」

龍「へっ？」

この声は早苗さん？  
どうして？

早苗「す、すいません。私、あなたの事が…その…す…好き、な  
んです…」

龍「ほえっ？」

何で？何で初対面である俺を？  
しかもモテないのに…  
何で？

龍「あの…何で、俺なんかを…」

早苗「／／／／／／／／／／…ッ！…！」

ギョッ

龍「はあああ…／／／／／」

早苗さんは俺の背中にしがみ付く。

何だか凄く恥ずかしい…

早苗さんも恥ずかしいのか、背中が熱い。

これは…フラグ立っちゃった？

マズイよ…俺まだ厨三だよ？どうすれば良いの？

そんな考えをよそに、早苗さんはさらに強くしがみ付くし、どんどん俺の背中が熱くなっていく。

そして…

早苗「龍神…さん…」

龍「さ、早苗…さん…?」

あわわわわわ…

ちよっと！誰かこの状況どうにかして…!!

俺まだ恋愛すらした事無いのに…!!

早苗さんは俺の向きを変え、目を閉じ、そっと顔を近づけて来る。

ちよつと〜!!!!  
もう神様仏様!!!!  
どんな形でも良いから助けて!!!!

そんな願いも虚しく、早苗さんはどんどん顔を近づけて来る。

だああああああああああ!!!!

もういいや!!!!

いつそのことこのまま接吻しちまおう!!!!

俺はついに吹っ切れた。

目を閉じ、ゆっくりと顔を近づける。

もう覚悟した事だ。

後悔はしない。

そんな時だった…

サー

神「お前等！何をやっているんだ!!!!」

間一髪、神奈子さんに助けられた。

あのまま来なかつたら今頃は…

この後、俺と早苗さんはごっぴどく叱られ、その後はまた深い眠り  
についた。

続く…

第11話 神社へお泊り（後書き）

さて、恋愛が出ちゃったぞ〜…  
これからどうなるかな？

ではまた次回。



第12話 妖怪の山を下りる時… 前編（前書き）

さて、守矢神社から離れ、妖怪の山を下りる龍神。だけど下りる時こそ、彼の不運の始まりだった。

ではどうぞ。

第12話 妖怪の山を下りる時… 前編

前回の俺は…

早苗さんの言葉に甘え、守矢神社で一晩お世話になった。

そこで食べた早苗さんの料理は…

超絶うまかった……！

こんなに美味しい料理が食べられるなんて…

俺ってなんて幸せ…！

それで食べ終わった後、諏訪子さんに部屋まで案内された。

そして風呂にも入り、スッキリした。

そう言えば、ここはあの人達が…

（早苗、神奈子、諏訪子の事）

なんて事を考えていた。

…それはいいとして、就寝前に考え事…

諏訪子⇨諏訪神社

神奈子⇨八坂神社

考えているのもめんどくなつたので寝る事にした…

すると誰かの足音がした。

足音が近かったので寝たふり作戦。

そしたら…

何とその誰かが俺の眠る布団に入って来た！

めちやくちや驚いた！

しかもその誰かが早苗さんだったのだ。

更に俺は驚いた！

早苗さんは俺の事が好きなんだと…

驚きを通り越しちゃったよ…

早苗さんが俺の事を好きになった理由を聞くと、恥ずかしいのか、俺の背中にしがみ付いて来た。

早苗さんは俺の向きを変え、ゆっくりと顔を近づけて来た。頭の中で凄まじく願ったが、早苗さんは止まる気配が無い。俺は諦めて同じ行動をした。

その時、神奈子さんが入って来た。ギリギリだった。

そして、今に至る…

今は昨日の出来事から夜が明けた後…

朝ご飯を食べているが…

神「じ〜…」

神奈子さんが疑いの目でこちらを見ている。

・・・

非常に食べ難い…

何だこれ？俺が悪いの？

早苗「はあ……」

早苗さんは申し訳無さそうにこちらを見てため息をつく。

早苗さんを責めるつもりは無い。

悪いのは欲だ。

欲の所為だ。

欲が早苗さんにあんな事をさせたのだ。

悪いのは欲だ。

諏訪「神奈子……」

諏訪子さんは神奈子さんを上手く制御していた。

何か…気まずくしちゃったな…

龍「あの…ご馳走さまです…ゴメンなさい…あんな事があって…全部僕が悪いんです。ですから…もう帰ります…」

早苗「龍神さん…」

諏訪「龍神君…」

神「ふん…」

諏訪「ちょっと、神奈子も何とか言いなよ。」

神「悪いのは全部あいつなんだから…」

早苗「やったのは全て私なんですよ？何故龍神さんを…」

神「あいつだってお前に…」

早苗「あれは私がさせた事なんです！龍神さんは何も悪くありません！私は……」

早苗さんは突然俺の腕を抱くと……

チュッ

早苗さんは俺の頬に……

龍「えっ！／＼／＼／＼……」

早苗「私は……龍神さんが……」

「好きなんです！」

堂々と、そして大声で早苗さんはそう言う。  
改めてマジっと思っ。

神「・・・」

神奈子さんは少し驚き、そして目を瞑って黙る。  
するじ...

神「わかった...お前がそこまで言うならそいつの事は許さう。だが、  
いき過ぎた事はするなよ。」

早苗「ありがとうございます...」

早苗さんは喜びながら更に強く抱きついた。

は、恥ずかしいって…

神「早速だな…言ったる…」

早苗「あっ！すいません！／／／／…」

龍「あの…でも、いつまでも居るわけにはいかないの…そろそろ…」

早苗「そうなんですか…」

龍「また会いに来ますよ。早苗さん。」

早苗「…はい…／／／／／」



早苗さんは顔を真っ赤にしながら返事をした。

自重しろ…俺…（いろんな意味で…）

そう言う事で、守矢神社を出た俺はある事を思い出す。

龍「そう言えば…ここどつと言った場所だろ…」

ここは山だ。

？おま何で今まで出てこなかったんだよ…

面白かったからな。

おいコラ…面白かっただと？ざけんなクソが…（怒）

ふふっ…すまんすまん…

龍「とりあえず下りるか…」

俺は山を下りて行く事にした。

龍「しかし、このまま下りて行っても、いつ下り切れるかわからないぞ?」

ヴォーーン!…!

龍「はあ…」

「なら代われ…」

スバツ

龍は音速で山を下りだした。  
と、ちよっともしない内に龍は立ち止まった。

龍「ん?」

「おい!隠れて撮影か?変わった趣味してんな… そんな事してねえで出て来い!」

龍はあらぬ方向を見て言った。  
すると…

？「いや、私が隠れて居ると何故わかったのですか？」

龍「お前のそのカメラの黒光り、そしてお前の視線にだ。」

「いつまでそこに居るつもりだ…」

？「わかりました、降りましょう。」

木の上から降りて来たのは…

背中に黒い翼、頭に飾りの赤い帽子？  
服は白シャツで、黒いカメラを所持。特に気になったのは履き物の

下駄。

何と両方一本足。

良いバランス感覚持つてんな〜…

じゃなくて、その少女はこう言った。

？「ご紹介が遅れました。私は、射命丸しゃめいまる 文あやと申します。」

「こう見えて私は新聞記者なのですよ！」

少女はエッヘンと言う具合に自分の事をペラペラと喋る。

新聞記者？…何となく見りゃわかる…

文は突然龍に近づき…

文「すみません！取材をよろしいですか？」

文は目をキラキラさせながら龍にそう言う。  
勿論、龍は…

龍「だが断わる。」

言うと思った…

龍はキツパリと文の取材を断わった。

文「そんな！ちょっとだけでも『断わると言ったら断わる。』…」

「でしたら、私とスペルカードで勝負して、私が勝ったら取材を取らせて頂きます。あなたが勝ったら取材は結構です。」

文はスペルカードの勝負を申し込んで来た。

龍「良いだろう…」

龍、手加減しろよ…

龍「心配すんな。」

文「では私から行きますよ!」

文は何処から取り出したかわからない椀葉の扇子で風を巻き起こしながら弾幕を放つ。

龍はそれに対し…

龍「出でよ風龍！」

文が放った風を利用し、急速で風の龍を創り出す。  
風龍は現れたと同時に文の放った弾幕を自らの身体で弾き飛ばす。

文「あやややや？」

龍「風をありがとう… おかげでお前を倒せる。」



文「ま、まだ諦めません！」

「竜巻「天孫降臨の道しるべ！」

龍「無駄だ！」

「風龍よ、その身の風を解き放て！」

文は巨大な竜巻を桜葉の扇子で巻き起こす。

龍は風龍を操り、姿を竜巻に変化させる。

両者の放った竜巻はどちらも強く、周りの木々が真空波で切れ、風で吹き飛ばす。

吹き飛ばなかった木は葉っぱだけ風に持ってかれた。

もうやめて！森林のライフは既にゼロよ！

的な…

気づくと両者の放っていた竜巻は消え、残ったのは竜巻の跡…

文「まだ！」

「幻想風靡！！！」

文は黒い翼を大きく広げ、音速でスツキリしてしまった森を縦横無  
尽に飛び回り、龍に攻撃を仕掛ける。

だけど龍にとってそれは…

龍「遅いんだよ…」

好都合だった。

何より俺は見て来た、こいつは既に光を越えている。  
光の速さを…

フッ…

龍のそのスピードに音は発生せず、周りは文が飛ぶだけ。

すると…

ズゴオオオオン！！！！

その音は飛んでいた文から聴こえた。

龍は先程のスピードで文に近づき、腹部に拳の一撃を与えていた。

文でさえ音速で飛んでいたのに…龍はそれを圧倒的に、そして絶対的に上回っていた。

文「・・・」

「……………ッ！！！！」

文自身が殴られた事に気づくのに、少し時間が掛かった。

文はそのまま気絶した。

龍「ダイナミックかつ、超手抜きで勝つたな。」

俺には本気で殴ったようにしか見えなかったがな…

龍「ちゃんと手は抜いたぜ？ 奴は気絶しただけだ。」

あっそ…

いいから下りようぜ…

いつまでもここに居るのは嫌だ。

龍「ほいよ。」

龍は再び、走り出した。

続く…

第12話 妖怪の山を下りる時… 前編（後書き）

長くなりそうだったので前後編に分ける事にしました。  
次回、下り切れるか？

ではまた次回。

第13話 妖怪の山を下りる時… 後編(前書き)

今回は後編!

妖怪の山は敵を招く?

ではどうぞ。

第13話 妖怪の山を下りる時… 後編

前回の俺は…

守矢神社を離れ、とりあえず山を下りる事にした。

龍が代わりに山を下りていた時、龍が突然何かに気づいた。

龍はあらぬ方向を見ながら出て来いの事を言うと、木から少女が出て来た。

少女は黒い翼が背中に生えていた。

名前は射命丸 文。

また妖怪とかだろ…

手にはカメラを持っていたし…あれ？

この何処の時代かもわからないような世界で何故カメラが？

今更気になっても仕方ないか…

カメラ持つてるだけに取材をしようとしていた。

龍は断った。

そしたらスペルカード勝負を申し込んで来た。龍が勝ったら取材は

結構。ただし負けたら取材を受けてほしいと…

結果は勿論、龍だ。

文の音速を超えた。光速を超えて…

龍は力を入れて無いと言うが、俺からは本気で殴ったようにしか見えなかった。

まあ、本気で殴ってしまったら、いくら妖怪でも腹に穴が空くだろう…

勝負が片付いたので再び山を下り始めた。



龍「ふんっ……」

どうした？

龍「見張りが居るんだ。」

今、滝の近くにいる。

そこには確かに見張りが居た。

盾と剣を持って周りを警戒している。

強行突破できないのか？

龍「おっ！良いのか？よし！」

そう言うと、龍は助走をつけて跳び、見張りに向けて飛び蹴りを放った。

「…！？」

見張りはこちらを向いた瞬間、？の顔をし…

ズガッ！

龍の蹴りが見張りの顔に直撃。  
見張りはそのまますっ飛んだ。

龍「これでよし。」

ありゃりゃ…

龍「行くぞ。」

龍は滝から降りるように飛び始めた。  
暫らくして、着地。  
龍は再び走り始めた。

龍「さて、何処まで続くかな？」

また何かありそうな予感…

龍「ふんっ…どうやらそのようだ…」

龍はふと走る事をやめた。

龍の止まった理由は恐らく…

龍「全く…厄がひでえな。こっちまで不運になりそうだ。」

「そうだろ、厄神さんよ。」

？「そうですね。」

龍が振り向くと、目の前にゴスロリ風のファッションをした緑髪の女性が居た。

龍「悪いが、今急いでるんだ。後にしろ。」

？「悪いようですが、そうは行きません。貴方はどうやら、噂に聞いた…」

「龍神さんですね？」

龍「全く…とつとと終わらせるか…」  
「出でよ土龍！」

龍は山の地面を操り、巨大な土龍を創り出す。

？「私の名は鍵山かぎやま 雛ひな。」

「厄符「バッドフォーチュン！」

雛は土龍に向けて弾幕と配置しながら飛ばす。  
弾幕は土龍に大量に当たるが、土龍は何も無かったのように雛に攻撃を始めた。が…

ボガーン

力無くその形を崩した。  
龍はそれに対し、笑い始めた。

龍「ふっはっはっはっ！やるな！おもしろいぞ！だが…時間は掛けられないんだよ！」

「裂拳「八裂！」

龍は一瞬で雛に近づき、正拳、裏拳、肘打ち、膝蹴り、回し蹴りをランダムかつ高速で叩き込む。

雛「あふッ！！！」

龍「終わりだ。」

龍は足を振り上げ、雛の肩に踵落としを叩き込む。  
雛は地面に向かって一直線。

そして激突。

ズガーーン！！！！

雖は地面にめり込み、そのまま起き上がらなくなった。

気絶しててくれ…

できればそうあってほしい。

今のは結構力出していた。

龍「さて行くか！」

龍はまた走り始めた。

暫らく走っていて、ようやく…

龍「そろそろ下り切るぞ！」

マジか？

龍「ああ！…うおおおらあああああ！…！」

龍は絶叫し、山から下り切った瞬間に思いつ切りジャンプした。

ようやく下りたか…

龍が着地し、姿が俺に戻された。

ヴオーーーン！…！

龍「ふう…！」

俺が歩き出した。その時…

龍「…？あるえ？地面の感覚無いんだけど？」

下に視線を移すと…



龍「もう…超絶ついてねえ…」

「穴じゃん………」

ヒュン

俺はそのまま穴の中へと落ちて行った。

続く…

第13話 妖怪の山を下りる時… 後編（後書き）

穴とは何か、わかりますか？

ヒントは、地 です。

ではまた次回。

第14話 地底に広がる謎の世界…その名は地霊殿（前書き）

はいはい！来ました来ました！

地霊殿！！！！

あっ！言っちゃった…

ま、いいや。

ではございませう。

## 第14話 地底に広がる謎の世界…その名は地霊殿

前回の俺は…

滝の近くで見張り発見。

強行突破できないか？と言ったら…

龍が見張りに攻撃。

見事に顔にヒット。そのまますっ飛んだ。

滝から降りて、また走り出したんだけど…

龍がまた止まった。

厄が酷いと言う。確かにわからないわけでもないが…

振り返るとまた女性。

あの…何で女性ばつか？

俺と同じ性別居ないの？

今更気にしても仕方ないか…それより…

女性の服：アキバで良く見かけるような格好だな… ゴスロリって

言っただけ？

その女性の名は鍵山 雛。

女性は俺の事を知っていた。…正式には俺じゃなく、龍を知ってい

た。だろう。

早く此処から離れたいから龍は土を操って土龍の姿を創りあげ、女性に攻撃を仕掛ける。

だが、女性の攻撃で土龍を打ち崩す。

それに対し、龍は笑い、スペルカードを発動。女性は気絶した。

直後龍は走り、妖怪の山を下りきった。

龍から俺に戻った後、一步足を動かすと…

下には穴があり、俺は落下。不幸だ…

それでもって、今どうなっているか…

…

実は今も落ちているのだ。

落下してから30秒 意外に深い。

暗いから何も見えない。

一体いつまで落ち続けるんだ…

ゴチーン！

龍「おっ…ッ！」

？「ひぎゃ…ッ！」

？誰かと激突？しかも頭を…つつつ…

…

ちょっとフリーズしたけど、大丈夫だ、問題無い。

しかし、こんなところで誰とぶつかった？  
検討はついた… ぶつかった相手は人間じゃないだろう。多分…  
…いい加減終われよ…まだ続くとは言わせんぞ…

ドガシャ！

・・・

落下が終わったけど痛い…

…：…そんな痛く無いな…龍の影響だろうか？  
それで事はいい。とりあえず起き上がろう。

龍「よっ」と…

？んだ此処は？地底の世界？こんなところで人が住めんのか？

？「ううう…痛い…」

あれ？そう言えば頭をぶつけたんだった。

・・・  
誰？何で釣瓶の中に入っているの？

龍「あの〜、大丈夫ですか？」

？「な…何とか…あの、あなたは誰ですか？」

龍「俺は拳咲 龍神です。」

？「私はキスメ。ひょっとして、人間？」

龍「はい、そうです。」

キ「ダメだよ！人間が此処に来ちゃ！」

龍「ダメと言われても、落ちちゃったので…。」

キ「…じゃあ仕方がないから私がさとり様に会わせてあげる。そうすれば戻れると思うよ。」

龍「ありがとうございます。」

キ「じゃあ、とりあえず此処の案内もしてあげるね!」

龍「あ、はい。」

何かよくわからないが、その さとり様?に会えばどつじにかなるんだな?  
なら良いんだが…

俺とキスメさんはしばらく歩いた。

いや、歩いたのは俺だけだ…

隣でキスメさんがふよふよ浮いてたし…

しかも釣瓶の中で…

•••

これはすぐに慣れそうも無い。

?「うう…妬ましいわ…」

?何?今の声?もしかして…ゆゆゆゆゆ…

幽霊?



？「妬ましいわねキスメ。あなた達がそんな男と一緒に歩いているなんて…」

と思ったら前から…

どっひゃー！！！！！

凄え怖い…目の下のくまも怖い…

いや？くまなのか？基本目の周りが黒い…

いやいやいや！

何だ？妬ましい？

？「妬ましい妬ましい妬ましい…」

来ないで…お願いだから…怖いから…

お願いだから…俺の…俺の…

龍「俺のそばに近寄るなああああああああああああ！！！！！」

ヴォーーーーン!!!!

キ「!？」

?「!？」

龍「はぁ…全く。何が妬ましいか言ってみろ！」

?「へっ？」

龍「言ってみろ…!!!!」

?「…男がカッコよかったから…妬ましかったのよ…」

龍「…好きにしろ。」

ヴォーーーーン!!!!

龍「はあ…ところで、誰ですか？」

？「水橋みずはし パルスイぱるすいよ。」

龍「じゃあパルスイさん、今臨在妬ましいと言わないで頂けませんか？

無理なら回数を減らしてください。」

「怖いんですよ…」

パル「わ、わかったわよ…」

改めまして…  
歩き始めたわけだが…

いや…さっきのは怖かった…  
真面目にホラー映画より怖かった…  
あの恐怖は二度と無いだろう。  
そうあれ！じゃなきゃ精神が持たない！

？「ん？キスメ、パルスイ。誰だそいつは？」

龍「あ、どうも。拳吠　龍神です。」

キ「落ちて来ちゃったんだって。」

？「そうなのか。で、何処まで行くんだ？」

キ「一応、さとり様に会わせようと思ってるんだけど、折角だから此処の案内もしようかね。」

？「なら私も一緒に付き合おうよ。」

「龍神と言ったね？私は黒谷くろたに　ヤマメやまめ。よろしくね！」

龍「はい。」

黒谷　ヤマメ。

黒い服を着た心の優しそうな少女だ。  
俺の経験上、この娘も妖怪だろう。

パルスィやキスメも含めて…

龍「ところで、何処に行くんですか？」

キ「最初は勇儀の所に行こうと思っていたよ。」

ヤ「確かに、あいつの所なら良さそうだ。」

龍「勇儀？誰ですか？」

ヤ「鬼だよ。とっても良い奴でさ、酒豪なんだよ。」

キ「おデコに長い一本角が生えているんだよ。」

龍「はあ……」

何だか少しばかり厄介な事になりそうなのかな…  
ちよつと覚悟しておくか。

そこで、着いたのが…

旧都。聞いた話だと、鬼がみんな此処に移り住んだのだと言つ。  
理由は嫌気が指したから…

それだけかよ… つまらないと変わらない理由じゃないか…  
まだ嫌気の方が理由らしいが…

そんな事はいいとして、連なる家ね中の一つに入って行った。  
ここに勇儀とか言う鬼さんが居るんだと…

ヤ「勇儀！邪魔するよ！」

？「ん？おお！ヤマメか！どうした？」

キ「実はね…」

龍「初めまして。」

？「誰だ？」

龍「あのですね…」

少年説明中…

？「なる程…そりゃついてないな…」

龍「もう、嫌になりますよ…」

？「自己紹介がまだだったな。

私は星熊<sup>ほしくま</sup> 勇儀<sup>ゆうぎ</sup>。」

龍「鬼ですよ。聞いています。」

勇「どれ？気分も良いし、一緒に飲むかい？」

龍「飲む？何を？」

勇「決まっているだろ！酒だよ酒！」

龍「いや、僕まだ未成年ですけど！」

勇「固い事言つなよ。さあさあ！酒を持って来い！！」

龍「いや僕はいらなですって！！」

ヤバい！このままじゃ酒を無理矢理飲まされる！

仕方ねえな…

ヴオーーーン！！！！

勇「うわっ？」

ヤ「なっ、何だ？」



キ「さっき見たあれ！」

パル「あれは何かしら？」

龍「…最初に言っておく。俺は あれ じゃない。俺は龍神だ。」

勇「…こいつは驚きだ…お前、そんなチカラ有ったのか？」

龍「正確には俺とさっきの奴はちゃんと自立している。だが、俺は生まれ変わりとしてこいつの中に存在した。だが幻想郷に来てから俺は覚醒し、こいつの中から姿を借りて出てくる事が出来るようになった。だな。」

「こいつと違う所を挙げるなら、性格と、好戦的と言ったところだ。」

勇「なる程…おもしろくなってきた。」

そう言うと、勇儀さんはお酒が並々入れられた杯を手に持ち、こう言った。

勇「この杯の酒が一滴でも落ちたら、お前の勝ち。どうだ？やるか

「？」

龍「ふふふ…辞めておけ。お前のその行為、仇となるぞ。」

勇「こつ見えて力は誰にも負けないと自負しているからね。」

龍「良いだろう…表に行くぞ。」

龍はそう言い、外に出た。

勇儀さんも後に続いて出てきた。

勇「さて、始めるか！」

龍「ふう…」

「来い！」

続  
く  
…

**第14話 地底に広がる謎の世界…その名は地霊殿（後書き）**

あまり地霊殿キャラは癖も口調もわかりませんね…

特徴が掴みにくい…

次回、勇儀の怪力VS龍の拳

ではまた次回。

第15話 鬼VS龍 世紀の戦い…(前書き)

どうも、どうもどうも！

世紀の戦いと書きましたが、そうでも無かったりして…

ではどうも。

第15話 鬼VS龍 世紀の戦い…

前回の俺は…

穴から落ちていた時に誰かと頭をぶつけた。

あれは痛かった…

その後、穴の落下も終わった。

地面に直撃！の筈が…意外と痛くない…

多分、龍の影響だろ…

起き上がると、そこにはなんと…

地底の世界が存在した。

いや、それよりも頭をぶつけた人は…

…

釣瓶の中に入った少女。

名前はキスメ

少女は俺を地上に戻す為、さとり様？に会わせてくれるようだ。

折角だから、この地底世界の案内もしてくれると…

少し歩いていると、何か声が…

妬ましい…と、今度は前から聞こえて来た！

思わず絶叫…

代わりに龍が何故妬ましいか聞くと…

俺がかっこ良かったから…

ありがたいけど、嬉しくも無いよ…

妬ましいと言う彼女は水橋 パルスィ

ホラー映画以上の恐怖を味わってしまったぞ…

…さて、また暫らく歩いていると、今度もまた少女。

名前は黒谷 ヤマメ

イメージとは違い、心の優しい娘だ。

すると、キスメは勇儀の所に行こうと言う。  
気になって聞いたら、何と鬼なんだと…

また暫らく歩いて旧都へ…

ここは鬼が地上から移住した地…

その連なる家の中の一つに入った。

その家の中に、勇儀らしき人物が…

名前は星熊 勇儀

体操服らしき物を着ていて、頭に一本角…ん？

あなたはユニコーンか何かですか？

テンションが高いのか、俺に酒を飲ませようとした。

危ういと思ったら、龍が出て来た。

勇儀さんは龍を見るなり、お酒の入った杯を手に持ち、勝負を挑んで来た。

そして龍と勇儀さんは戦う事に…

龍「来い！」

「と、言ってもお前は杯を持っているから攻撃はできないか…」

勇「まあ、出来なくも無いが…」

龍「なら、行くぞ！」

その行くぞと言った瞬間、龍は既に勇儀さんの目の前に居た。

勇「!？」

勇儀さんはいつの間に？と言っ顔をし、後ずさる。

だが、龍はその隙を逃さなかった。

龍「そして決着…」

龍はそう言い、左拳を勇儀さんの顎目掛けて繰り出す。

だが、勇儀さんは龍の拳をサッと避けた。

すると龍は、静かに微笑った…

龍「ふふ…お前の負けだ…」

その言葉に勇儀さんは表情を変えた。

そして手に持っている杯に目を移す。



勇儀さんは無言で驚いていた。  
何故なら…

勇「な…無い…杯が無い…」

そう。勇儀さんが驚いた理由…  
それは杯が手から消えていた事。  
キレイさっぱり…

龍「その杯って、これの事か？」

龍は右手に杯を持っていた。

いつの間に…？

龍の中で見ていた俺も驚いた。

気づかないなんて…

そう言えば、あの時…

（龍「なら、行くぞ！」）

（その行くぞと言った瞬間、龍は既に勇儀さんの目の前に居た）

あの時に龍は右手で杯を…

龍「どうする？今度は俺の杯の酒を一滴でもこぼしたら、お前の勝ちだ。」

勇「なるほど、逆に今度は私が攻める側か…」

「よし！じゃあ行かせてもらう！」

「鬼符「怪力乱神」！」

勇儀さんは弾幕を回転させながら全体に伸びさせ、弾幕を配置する。

そして色が変わると弾幕は動きだし大量に散らばった。

龍「そんなんじゃ、こぼす事は遙か先だぞ。」

龍はそう言い、散らばる弾幕を走って避ける。

手に持つ杯の酒を一滴も零さずに走る抜く。

すげえバランス感覚いいんだなあ…

勇「やるね！じゃあこれならどうだ！」

「怪輪「地獄の苦輪」！」

勇儀さんは巨大な輪を6つ放った。

龍、何か奇妙だと思わないか？この弾幕。

そりゃな。だからあえて攻めない。

龍「この場合、輪を避けて一撃を加える！」  
「破拳「バスターインパクト」！」

龍は右拳に力を込め、勇儀さんに向けて拳を構えながら巨大な輪を避ける。

そして…

「くらえええ！」

龍はその言葉と共に拳から拳気を放つ。

拳気は一直線に勇儀さんに向かって突き進む。

そして…

ブアーーン！！！！

勇「くっ…ああああ…ッ！！！！」

拳気は勇儀さんに直撃。

かなりの大ダメージを与えただろう。

龍、手加減したよな？

一応な…

なら安心だ。

何せ龍の力は神様を圧倒的に上回っているからな。

あんな攻撃、本気でくらったら妖怪でも形が無くなるぞ…

勇儀さんは鬼だと聞いた。

少しは平気だろうけど、龍にはその 平気 が通用しない。

勇「うつ…！…はぁあ…」

やっぱり思った通り。

あの一撃でもうダウン寸前だ。

ちなみに忘れていたが、まだ酒は零れていない。

龍「どうした？もう終わりか？」

勇「ま…まださ…まだまだ…！！」

「力業」「大江山嵐」！！」

と、突然大玉弾幕が左斜めから大量に飛んで来た。

龍「ふふ…おもしろい。」

龍は見事なバランスで大玉弾幕を避ける。

すると、今度は右斜めから大量に弾幕が飛んで来た。

龍「…忙しい弾幕だな。」

「一気片付けるか…」

「龍の怒り、！」

なっ？おい、今、怒りって…

おま、それは…！

心配すんな！一時的に怒りの力を解放するだけだ。



どうやら龍の力をその目で知ってしまったようだ…

龍は怒りの力を解放した事での、杯の酒を一滴も零していない。

ふう〜、良かった。

て…俺何でまた龍が酒を零すのを恐れているんだ？

別に問題無いのに…

龍「よし、問題無いな。」

龍は赤い眼で杯の状態を見ながら頷く。

龍が怒り状態に入ると、眼が赤く染まり、本来無い筈の牙が生える。

これは本来の力を抑える拘束具が外れた状態。

こうなったら世界は愚か、宇宙が完璧に消せるだろう…

龍「さて、続けるか…」

龍は怒りの力で杯が割れる前に力を鎮めた。

勇「よし…これで決めるよ!!!」

「四天王奥義」三步必殺「!!!」



勇儀さんは大地を揺るがす一步を踏む。

すると、弾幕が全体に広がる。

また一步踏む。

すると、第一弾幕に続くように第二弾幕も広がる。

龍、これは…

龍「来るな…」

勇儀さんは再び大地を踏む。

すると、旧都を覆い尽くす程の弾幕が広がった。

広がった弾幕は固まった状態から動き出し龍に向かって飛んで来る。

龍は上手く見極め、弾幕をかわす。

勇「最初はこんなもんさ。  
次は避け切れるかな!!」

勇儀さんはそう言うと、再び大地を踏んだ。

弾幕は先ほどの物と大差の無い弾幕が第一、第二と広がる。

そして最後に思いつ切り大地を踏んだ。

すると何層も重なった大玉弾幕が旧都を埋め尽くす。

だが…

龍「なるほど、やっぱりおもしろいな。」

「お前はよ。」

龍は杯片手に勇儀さんの前に現れた。

勇儀さんは固まった。

あの弾幕の壁をどう避けたのか…  
恐らくそれが頭の中にあるだろう。

それは、こう言う事だ…

まず、第一、第二の弾幕が出た直後、第三弾幕が出る前に地面に降りる。

勇儀さんは地に立っているから勇儀さんに向かって行けばいい。

第二弾幕の隙間の狭さには驚いたけど…

第三弾幕が広がった直後に勇儀さんに向かって走る。

そして第二弾幕の隙間を掻い潜る。

僅かだが、第二弾幕が第三弾幕の現れた風圧によって隙間が開く。そこを通り抜ける。

この方法は最初の三歩必殺を見て考えついたと龍は述べる。

第二弾幕を抜ければ第一弾幕は緩いから後は勇儀さんまで一直線。

こう言う事だ。

龍「決着だな…」

勇「ふ…負けたよ。強いね…」

龍「なかなか楽しめたぞ。」

ヴォーーン!!!

龍「あの、大丈夫ですか？」

勇「ちょっと…痛いかもね…」

龍「すみません…」

勇「いいよ、私も楽しかったし…いたた…」

「あれ？杯のお酒はどうした？」

龍「あれ？そう言えば…ヒック…」

「さては…ヒック…龍の奴…ヒック…」

「飲みやがったなあ〜！ヒック…」

俺の意識は遠のき…

そのまま…眠りについた…

続く…

第15話 鬼VS龍 世紀の戦い…（後書き）

最後龍がお酒飲んじやいましたね。

ちなみに三歩必殺の攻略ですが、こちらが小説の為に勝手に作った方法です。

風圧はありませんよ？

ではまた次回。

第16話 目覚めたらそこは乱れ宴…（前書き）

前回の戦い…

龍が戦闘終了直後、杯の酒を飲んでしまい、その結果龍神が酔う羽目になってしまった。

その後、龍神が起きて見た光景は…

ではどうぞ。

第16話 目覚めたらそこは乱れ宴…

前回の俺は…

龍と勇儀さんが戦う事に…

まず龍が攻め込んだ。

勇儀さんに一瞬で近づき、左拳を顎目掛けて繰り出した。ただ、勇儀さんは後ろに跳んで避けた。

その時、龍は何故か微笑い、俺の勝ちだと…

勇儀さんは奇妙に思い、杯を持っていた手に視線を移す。

勇儀さんは静かに驚いた。

何故なら手には杯が無かったからだ…

その理由は龍が最初に攻め込んだ時だ…

あの時既に龍は右手で杯を奪っていた。

そして今度は龍が勇儀さんと同じ事をした。

結果は龍の勝ち。

だけど…

龍は酒を飲んだため…

俺は…強烈な眠気に襲われ…倒れながら眠った…

…

うん…

あれ？俺何してた？

ああ…そう言えば思い出した…

あの時龍が杯の酒を飲みやがった所為で俺が酔って眠っちまったんだ…

…頭いてえ…

とりあえず、起きようか…

俺はズキズキ痛む頭を押さえ、重い体を起こした。

すると何故だか周りが騒がしい。

何だ？一体…

俺は目を開けた。

すると…

？「よう、起きたかい。」

龍「…誰？」

？「私は萃香、伊吹いぶき、萃香すいか。」



勇「龍神、起きたか！そいつは私と同じ鬼だ。」

龍「…そうなんですか……て、ええええええ！！！」

俺は驚いた勢いで頭痛と眠気がすっ飛んだ。

龍「おおおおお…鬼？」

萃香「そこまで驚かなくてもいいだろ…」

勇「そうだ。だって初めに私に会っているんだからな。」

龍「いや…ちょっとですね…」

「それよりこんなに騒がしいのは何故に？」

勇「いや〜、急に萃香やお仲間が入って来たからな。気づいたら盛り上がった。」

龍「そうなんですか…」

？「ようやく起きたか！このモテ男！」

おゝい！誰か！ここに紅白未成年の夕子の悪い酔っ払いが居ますよ！

（棒読み）

？「お前も飲め！こんにゃろう！！」

白黒の未成年も居ますよ。

誰か何とかして！

（棒読み）

と言っても意味無いか…

とりあえず水飲ませるか…

俺は近くにあった水の入った枡を手を取った瞬間…

龍「水でもくええ！」

紅白と白黒の未成年の口に向かって水を投げ込んだ。

すると…

バシャ！

？「うわっぷ！！」

？「あつば！！」

二人は水が口の中にいきなり入った所為でゲホゲホと咳込む。

龍「気分はどうだ？」

霊「ゲホゲホッ！…何とかね…」

魔「ゲホッ！！あああ…頭いてえ…」

龍「全く、タチが悪い酔っ払いだっただぞ、二人共…」

「ところで何でここに居るの？」

霊「暇だったから遊びに来たのよ。そしたらあなたが居たのよ。」

魔「そんでもって勇儀が“一緒に飲まないか？”って誘って来たん

だ。  
」

龍「それでこの状況か…」

勇「いいじゃないか！大人数で飲めば酒も美味くなる！」

萃香「そうさ、私達はこれを娯楽にしているようなもんだからな！」

龍「ああ言っているから…まあいいか…」

勇「よし！そうと決まったら『僕は飲みません！』んだよケチ…」

勇儀さんはブツブツ言う。

何がケチなのか言っただけほしいな全く…

俺は別にケチじゃない。

未成年飲酒禁止を守っているだけだ。

龍「しかし…」

「霊夢、魔理沙…お前ら何人連れて来た…」

霊・魔「5人。」

龍「にしては多く感じるのは気のせいか？」

5人…それはレミリア、咲夜さん、妖夢、幽々子さん、紫。

……やはり多く感じる。

それは周りに他の鬼達が居るからだろうけど…

龍「何故に来た？」

レ「霊夢達について行ったら此処に辿り着いたの。」

ストーカーじゃん…

咲「お嬢様お嬢様お嬢様お嬢様お嬢様…」

咲夜さんは頭が逝っている…

幽「あなたが居ると知っていたらそれなりの準備はしたわ。」

何の準備ですか…

妖「……」

黙るなよ妖夢…

紫「来ては行けないとは言って無い筈よ？」

知るかよ…

霊「まあ、勝手について来たもんだから別にいいじゃない。」

龍「良い悪いの問題じゃ無いんだよな…」

魔「じゃあ何だ？」

龍「いやね…最近鋭いんだよ…」

魔「何が？」

龍「俺の勘が…しかも…」

「女の人に対する勘が…」

霊「どう言う意味？」

龍「この後わかる…1、2、3…」

幽「えへ？」

幽々子さんはいきなり抱き付いてきた。

…背中に柔らかい何かが当たってるよ…

龍「ほらな…」

幽「ねえ…お姉さんお酒飲んだら酔っちゃった〜。」

幽々子さんははーっと吐息を俺の耳に吹きかけた。

耳？

それはヤバい…？

龍「あうっ！！！！」

耳は弱いんだよ…

幽「あれ〜？耳が気持ちいいの？」

「じゃあもつとしてあげる？」

これ以上先に行くとR15を超えるぞ…

俺は無理矢理幽々子さんを振り払った。

幽「あん！いた〜い？」

この人大丈夫か？

多分ダメだろうけど…

だいたいお酒の力借りて俺を誘惑するなよ…

レ「ズルい！私も！」

今度はレミリアか…



幼女なら心配無い。

と思ったら…

カブ

ん？何この音。俺の耳から聞こえたよ？

・・・

あああ！！！

龍「くう…あああ…！」

レ「ウフフ、凄い感じてる？もっとやっちやおう？」

幼女と思って舐めていた…

どうにかしよう…

龍「噛むな！！！」

俺はレミリアを振り払った。

全く、油断も隙もねえな…

今すぐ此処から出よう。

俺は立ち上がり、勢い良く走り出した。

が…

紫「待ちなさい。」

龍「ええええええええええ…！」

今度は紫に足を掴まれ止められた。  
勢い良く走っていたから前に顔面から転倒した。

龍「いてえ……」

紫「私にも耳嚙ませて？」

龍「い・や・だッ…！」

紫「あら、逃げられると思うっ？」

龍「んだと？」

俺は体を起こそうとしたが、上がらない。

龍「何？」

俺の腕や脚は紫のスキマによって抑えられている。

紫「大人しくしなさい？」

マジかよ…

紫は口をそっと近づけ…

カプ

啞えた。

ダメだ…

龍「はうううう…!!!!」

紫「かわいい？」

更に紫は俺の耳を吸い始めた。

龍「ああああ……！ああああ……！！！」

「……………吸うな……！！！」

「て言うか、咲夜さんに妖夢！助けてくれ！」

そして二人はこう返した。

咲「お……お嬢様の命令ですので……………」

妖「お……同じく……………」

二人は俺を見ずに顔を真っ赤にしながらそう言った。

何でだよ……

レ「そう言う事だから……」

幽「諦めなさい？」

こっち来んな…

紫「大丈夫、たっぷり可愛がつてあげるから？」

？じゃねえよ！

そうだ！霊夢に魔理沙！

龍「れ、霊夢！魔理沙！助けてくれ！」

だけど二人も…

霊「嫌、何でいちいちあんたを助けなきゃいけないの？／／／／／  
…」

魔「そ、そうだ！それに…この光景も…たまには良いかもな／／／  
／／…」

と、言った。

ふざけんなよ…

どこに目を付けて言ってるんだよ…

何故か周りの勇儀さんや萃香や他の鬼達もじゅっつとこちらを見てい  
る。

見て居ねえで助けるよ…

そんなにこれがおもしろいか？

・・・

よしわかった…

どうなっても知らねえぞ？

俺は怒り任せに全身に力を込めた。

すると…

ヴォーーン！！！！

よし成功！

後は徐々に怒りの力を上げて行けば…

龍「ウウウウオオオオオオオオ！！！！」

龍に変身だ！！！！

ヴォーーン！！！！



皆が一斉に土下座した…

その後はそのままだ…

しばらく籠の姿を借りたまま…

その間みんなは途轍も無く静かだった…

その日はそこに泊まった…

続く…



第16話 目覚めたらそこは乱れ宴…（後書き）

龍「ところで作者。ちよつといいか？」

作者「これはこれは龍さん。何ですか？」

龍「後少しで辰年…つまりは俺の年のわけだが…」

作者「それなら問題ありません。

何故なら 東方龍神録・新年明けおめスペシャル〜今年は辰年、龍の年〜

をやりますからね。」

龍「俺の事を祝ってもらえればそれで良かったんだが…」

作者「まあそう言わずに…」

「次回は龍神の過去を番外編として書きます。」

龍「だそうだ。それじゃあまたな。」

番外話 拳咲 龍神の元日常（前書き）

龍神の元日常…

つまりは番外話

望んだ方も望んで無い方もゆっくり視ていってください。

ではどつど。

番外話 拳咲 龍神の元日常

今回の俺は…

作者が気まぐれで書いた番外話に出る。

これはまだ俺が幻想郷に辿り着く3日前の事だ…

龍「……ううん…」

「もう朝かよ…眠てえ…」

知っていると思うが、俺はまだ中学3年生。

今は結構大事な時期…

大事な時期とは言え、どうしようも無いのが学力。

成績は毎回見せるのが恥ずかしい。

何せほとんどが1か2なんだからな…

特に数学…

あれは人間がやる物じゃない…

1次関数がどうたらこうたらでわけがわからない…

あれをテストで毎回90以上取っている奴の気が知れない…

まあ、そんな俺でも優位つ誇れる教科は…

美術だ。

昔から絵を描くのは好きだった。

授業中つまらない場合はいつも落書き。

落書きを見つかって怒られた時には、いつも最後には絵が上手いと褒められる。

夏休みの宿題でポスターを描いて提出。そしたら描いたポスターが賞を取ってしまった。

どんな賞かは恥ずかしくて言えない…

とにかく凄い賞を貰った。

そのおかげで1だけの中に5と言う成績をいつも取っていた。

まるで道路に咲く一輪の花のように…

龍「ふあ〜…さて…」

「朝飯 朝飯。」

ようやく布団から起き上がった俺は今、親が居るであろうリビング  
に向かう。

俺の家は3LDKの二階建て一軒家。

俺の部屋は洋室のくせに和の布団が敷かれる。

まあ、布団が好きだから良いのだけど…

龍「腹減った…」

頭を掻きながら俺は階段を降りて食卓へ…

テーブルに並んでいたのは  
ハムエッグか…

まあ、朝はこれくらいが良いよな。

俺は椅子に座るや否やハムエッグを一瞬でたいらげた。

母「龍神、そんなに早く食べなくてもいいでしょ。」

龍「別に良いじゃん、腹減ったんだから。」

父「しかしお前は本当に食べるのが早いな。」

龍「そう？俺は普通だと思うけど。」

「んじゃそろそろ準備するか。」

俺は自室に戻って制服に着替えた。

そしてスクールバッグを背負い、家を出た。

そして今は学校…

1時間目から数学とか…ふざけてんだろ…

この場合、俺は寝るか落書きをする。

仕方ない…寝るか…

現在は休み時間…

友達が居ない…

一人は慣れたけど、やっぱり孤独感は捨てきれないな…

一人机で寝ている俺…

起きるか…

俺は起きてトイレに向かった。

ただ黙って…

そして今は帰宅途中…

トボトボと歩いて帰るつもりは無いが、だからと言って堂々と帰るつもりも無い。

そんな状態で帰っていると…

?「よう。友達が居なくて寂しいってか?」

後ろからそう聞こえた。

チツ…誰だよ人の逆鱗に触れる奴は…

そう思いながら俺は後ろを振り向く。

そしたら…

龍「チツ…誰だよ…誠!?!」

?「よう、久しぶりだな。」

俺の後ろに居たのは引越した筈の  
桐生 誠。

龍「お前！何でここに…」

誠「親がさ、特別に4日間休みになったんだよ。それで3日ここに居る事にしたんだ。」

龍「そうなのか。でも、戻って来たと言う事は学校も…」

誠「ああ、休んで来た。」

龍「はあ…」

誠「なあ、これから暇だろ？一緒に遊ぼうぜ！」

龍「ああ！」

俺と誠は誠の家に向かい、そこでゲームとかをして日が暮れるまで遊んだ。



翌日…

俺は今日も学校だ。

あいつは今日も休みなんだろうな…  
たく、羨ましいよ…

俺は今学校で退屈な授業をしているってのに…

今は国語の授業中…

まだ国語なら許せる。

嫌なのは数学と英語と社会と家庭科。

まあ許せるのは国語と理科と技術。

もっとやって欲しいのは美術と体育。

ま…そうはいかないのが現実だな…

実際、美術は週一しかやらないし…

そのくせ数学や英語は週4回もやりやがる…

全く…

うぜえ…

飛ばして今は4時間目…

腹がうるさく鳴るが、そんな気分は今すぐにも捨て去れる。

何故なら…

今は美術の授業だからだ。

待っていましたとばかりに俺は授業に真剣に取り組む。

だって美術だぜ？

俺からしたら最高の時間だよ。

今日は砂絵だな。

よし、いい作品に仕上げてやるぜ。

そして…

龍「先生、出来ました。」

最近作品を仕上げるのに時間を掛けない。  
勿論、手も抜かない。

・・・

さて…飛ばして今は家…

まだ帰って来たばかりだ。

すると…

？「おっ！龍神！」

あら？この声は誠？

誠「龍神！遊びに来たぜ！」

誠は俺の部屋のドアを開けながら言った。

龍「誠！何だよ。」

誠「折角だからお前ん家で遊ぼうと思ってな。」

龍「んじゃ、PSS3で遊ぶか！」

誠「おう！」

PSS3ソフトはあの有名な格ゲーだ。

俺はPSS3にスイッチを入れた。

龍「よし、じゃあ俺は……」

「RYだ！」

誠「じゃあ俺は…」

「KEだ！」

龍「そんじゃ…」

誠「レッツ…」

龍・誠「バトル！！！」

まずは俺が攻める。

龍「先手必勝！波動！」

誠「甘いな！」

誠はジャンプで避けてキックをした。

龍「何？」

誠「まだまだ！」

誠はそこから更にコンボを繋げ…

誠「くらえ！昇龍！」

必殺技を繰り出しやがった。

龍「負けるか！」

受け身を取って反撃だ！

龍「竜巻旋風！」

必殺技は見事にHIT。

誠「くそ！」

龍「必殺コンボ！昇龍！」

竜巻旋風 のから繋げる昇龍 のコンボ。

誠「うわぁ！やるな！」

龍「お前こそ！」

誠「そろそろ終わらせる！」

誠は超必殺技を繰り出した。

龍「あぶねえあぶねえ。」

だけど避けた。

龍「今度はこっちの番だ！」

俺は超必殺技のコマンドを入力し繰り出す。

龍「くらえ！」

誠「なっ！くそ！あっ！ああ…：やられた。」

龍「どうだ！」

誠「へへ、まだまだ！」

龍「そう来なくっちゃ！」

俺と誠は日が暮れるまでゲームで遊んだ。

そして…

今日は休みの日…

有意義に過ごせる日…

だけど今日の俺は…

憂鬱だった…

よくよく考えてみれば今日帰っちゃうんだよな…誠…  
また友達が居ない日が来るのか…  
はあ…

そんな事を考えていたら突然…

？「なら、私達の世界に来る？」

そんな声が聞こえた…

そして俺は…

知らない森に居た…

番外話終了…



番外話 拳咲 龍神の元日常（後書き）

結局こうなっちゃいました…

やっぱり日常書くの苦手なのかな…？

では本編へ…

おっと！気がついたら

PVが1万5千を超えているし、ユニークも3千を超えている！

これはもう読者様に感謝でしょ！

ありがとうございます（＾―＾）

第17話 さとり様のペット、燐と空（前書き）

はいどうも超絶暇人です！

今回はまんまですネ…

ではどうも。

## 第17話 さとり様のペット、燐と空

前回の俺は…

龍が酒を飲んだ所為で寝ていた…

ふと気がつくと、周りが騒がしい…

俺は体を起こして目を開けたら誰かの声が聞こえた。

俺は誰か聞いた。

名前は伊吹 萃香

直後勇儀さんが萃香と言う人が鬼だと…

聞いた瞬間驚いた…

まさか鬼だなんて…

しかも容姿は子供だし…

それよりも気になったのは霊夢や魔理沙が居た事。

酒をがばがばに飲んでいて夕子の悪い酔っ払いみたいだった。

何で俺より小さい少女が酒を飲んでいる…

俺は二人をどうにかする為に水の入った枡を持って水を二人の口目

掛けて投げ入れた。

水は見事に二人の口に入った。

霊夢と魔理沙が落ち着いたところでまた気になる事が…

レミリア、咲夜さん、幽々子さん、妖夢、紫が居る事。

レミリアはストーカー行為をしたり…

咲夜さんは頭がおかしくなってたし…

幽々子さんはわけのわからない事言っし…

妖夢は何も言わないし…

紫はいいじゃないと言っし…

それ意外にだ…

俺の勘が感じている…

女性フラグを…

案の定幽々子さんが俺に抱き付いて来た。

すると幽々子さんが俺の耳に吐息を吹きかけた。

俺は耳が弱いんだよ…

ヤバいのを感じた俺は幽々子さんを振り払った。

今度はレミリアが俺に抱き付き、耳を噛んだ。

やめろ！！！！

俺はまた振り払い、走って逃げる。

すると今度は紫が俺の足を掴んだ。

俺は走っていた勢いで顔面から倒れた。

逃げようとするとスキマで動けず…

耳を啜えられ…吸われ…

助けを求むも霊夢も魔理沙も咲夜さんも妖夢も他のみんなも助けて

くれない…

何で助けない…たくつ！

俺は怒り任せに全身に力を含め、龍に変身した。

俺は拳をバキボキ鳴らし、言葉を発した。

俺は赤い眼で睨みながらニヤリと笑うと…

みんなが一斉に土下座した。

そして翌日…

龍「今日はどうするんですか？」

キ「今日はさとり様のところへ行こう。」

ヤ「ひょっとしたら空や燐が居るかもしれないしね。」

龍「空？燐？誰ですか？」

パル「さとり様のペットよ。」

龍「えっ？ペット？人じゃないんですか？」

キ「ペットだよ、妖怪の。」

ヤ「空は地獄鴉。燐は化け猫だよ。」

龍「これはまた凄いペットを飼っているな……さとり様って……」

キ「じゃあ行こう。」

俺とキスメとヤマメとパルスィはさとり様に会う為、歩き始めた。

しかし……

地獄鴉に化け猫…

変に感じるのはそれを飼っていると言う さとり様…

きつと、また何か良からぬ事があるのだろうか…

こんな事が後どれくらいあるのか…

はあ…溜息が出るよ……

そんな事を言ってから少し経った…

すると…

？「あれ？キスメにヤマメにパルスィに……誰？この人間。」

キ「紹介するね、彼は龍神君。穴から落ちて来ちゃったんだって。」

龍「拳咲 龍神です。」

キ「龍神君、彼女は燐。さとり様のペットだよ。」

燐「初めまして。」

「私は<sup>かえんびょうりん</sup>火焰猫 燐。」

火焰猫 燐

周りにドクロの靈魂があり、赤髪に耳が生えている。  
見た通り、確かに化け猫だ。

龍「あなたが…」

燐「で？何の用なの？」

ヤ「実はさ、こいつを地上に戻す為にさとり様に相談しに来たんだけど…」

燐「なんだそう言う事か。今さとり様は留守だよ。」

キ「ええ？そうなの？」

燐「うん、何か珍しく外の風に当たりたいとか言っ行って行ったよ。」

ヤ「そうかあ…」

燐「ところでさ、昨日のバケモノの叫び声みたいなの聞いたかい？」

おつと…

これは俺じゃん…

キ「ああ…あれね…」

ヤ「う、うん…聞いた聞いた…」

パル「あ、あれは何だったのかしらね…」

龍「ほ、本当ですね…」

俺達は揃って苦笑いしながらそう言った。

燐「あの叫び声は一体…」

キ「そ、それより…空は？」



燐「ああ、そう言えば姿が見えないような…」

燐が辺りを見回して居ると…

？「私を探してんの？燐。」

その声は燐の後ろから聞こえてきた。

？「おっ？見た事の無い人間だね。」

燐「落ちて来たんだって。」

？「落ちて来た？あっはっはっ！！！！バカだな落ちて来るなんて。」

燐「空、あんたが言える事じゃないでしょ…」

？「うにゅ〜…」

「とじろでお兄さん、名前は？」

龍「拳咲 龍神です。」

？「お兄さんなのに敬語？まあいいや…」

「私は靈鳥路れいこうじ 空くう、よろしく！」

靈鳥路 空

背中に翼があり、右手に何か筒らしき物を付けている。

何だこの筒…

龍「あの…その手に付けている物は何ですか？」

空「ああ、これ？これは…」

空は右手の物を俺に向けて構えた。

あれ？嫌な予感…

燐「ちよっ！空！！」

空「こっつするんだよ！」

空は右手の物から炎のようなレーザーを撃ち出した。

もう嫌だ…勘弁してくれ…

全く、その通りだな。

ヴォーーン!!!

炎のレーザーが目の前に来た瞬間、俺の全身が青い業火に包まれた。

世界はまるでスロー…

姿が龍に変わった瞬間、世界が元通りに動き出す。

ポォーーン!!!

炎のレーザーが龍の体に直撃。  
ただ龍は何事も無かったかのように首を鳴らし、こう言った。

龍「全く、俺が出なかつたらどうするんだっての……」

俺が龍に変わったのを見た燐と空は驚いていた。

燐「ば…バケモノ…!!!」

空「一体何なの？」

龍「驚いたか。俺は龍神…名の通り、龍の神だ。」

「後な、俺と奴は自立しているから、奴が変身したんじゃない、俺が奴と入れ替わった…と言う事だ。」

燐「もしかして、あの叫び声はあんたなの？」

龍「正解であり、不正解だ。」

燐「どう言う事？」

龍「奴は怒りの力で俺の姿を借りる事ができる。」

空「ややこしいよ全く……」

龍「お前……結構実力あるな。」

空「それが何……？」

龍「俺と戦え。」

おい……何を言っているんだよ龍……

お前が好戦的なのは知っているけど……

たまには戦わないと言つのを知らないのかあ……！！！！

空「ふふ……いいよ！私の力……」

「核融合の力をとくと味わえ……！！」

そう言つて右手の物を龍に構える。

もういいです……

流れに任せます……

龍「核融合か…おもしろいなお前。だけど言うておく…」

「究極だろっがなんだろうが…俺にとっては、貧弱に過ぎない。」

続く…

第17話 さとり様のペット、燐と空（後書き）

今回は会話だけ…

今回は究極のエネルギー、核融合を操る少女…

霊鳥路 空

VS

全てを凌駕し、神すら貧弱に感じる存在…

龍神

戦いの行く末は…

特別話 第1 新年明けおめスベシャル！ ～今年は辰年 龍の年～（前書き）

今回は特別話！

龍「本当にやるとはな…」

作者「今回は特別ですよ！

今回特別話は龍神の過去のお話ですよ！」

龍「俺か…まあいい…」

「俺が生まれ変わる前を知ってもらったのも悪く無いな…」

作者「でしょ！なので…」

「ゆっくり視て行ってね！」



特別話 第1 新年明けおめスベシャル！ ～今年は辰年 龍の年～

今回の龍は…

また作者の気まぐれから作られた特別話…

今度は龍が生まれ変わる前の話だとさ…

チャン…チャララララン

龍「明けましておめでとぅございます。」

「今回の特別話を視て頂き、誠にありがとうございます。」

「僕も何故か今回ばかりは和服に着替えております。」

「いやそれはいい？ですな…」

「とりあえず今年初の東方龍神録は…」

「龍の過去のお話ですね。皆さんも気になったと思います。僕も気になりましたよ。」

「龍は何故に生まれ変わり、俺になったのか…  
そして何故にあそこまでチートに強いのか…」

「そんな龍の過去のお話です。  
ではどうぞ。」

東方龍神録……  
Before・the・episode…

さて…

さてさて…

今回は俺の過去の話なわけだが…

どこから話そうか…

まあいい。

俺の生まれたところから話すとしてよう…

俺とはある伝説に載っている胴長龍だった…

だが、そんな俺がある日…

姿が変わった…

いわゆる…進化だ。

俺の姿は人の形になった。

頭、手、足以外は普通の人間と変わらない。

まあ…皮膚の色だけは別だが…

深い海の色…つまりは青

身長は2mいくつか…

…

自分の体を測定するのは気持ち悪いな…

龍「…ここは何処だ？」

まず気にすべきは此処だ…

気がついたらここだ…

すると、俺は気配を感じた。

龍「誰だ？」

俺は気配を感じた後ろへと振り向いた。

そこには…

龍「!？」

そこには元の俺の姿があった。

緑色の体に長い胴…

間違い無く俺の体だ。

だけど一つ違った…それは…

？「我はお前…お前は我…」

俺の元の体が実際に動いていると言っ事だ。

何がどうなっているかはわからない…

聞いてみない事には…

龍「お前が俺…どう言っ事だ？確かに俺の元の体はそれだ。だから  
と言って、お前が俺と言っ事は無いだろ。」

俺がそう言っと元の体が返してきた。

？「確かにそうだ…だが、一つ言っと…」

「お前は我の心の闇だ。」

龍「闇…だと？」

？「我は龍神。神の最高位である龍の頂点なり…」

「お前は我の心の闇…つまりは元々一つだった…」

龍「納得できないな… もうちょっとわかりやすく説明してくれ。」

龍神「我は神…世界は全て我によって動いている…」

「だが、ここ最近で我の体に異変が起きた…」

「それは龍神…闇のお前が我の心にできたからだ…」

龍「俺が闇ねえ…んで、その続きは？」

龍神「私の心に闇が誕生した瞬間、私の周りの同士達は皆闇に染まっ  
っていった…」

「人間も闇に侵され、罪を犯すようになった…」

「我もお前の闇によって体を蝕まれていた…」

“このままでは我だけで無く、他の同士や人間達も闇に支配され、  
滅んでしまう…”とな…」

「我はそれを避ける為に自らの心の半分を取り除き、お前を創り出  
した…」

今の話でほとんど理解できた。

俺が闇である事もわかった。

ただ……

龍「じゃあ、闇である俺が何故闇の力が出ない。」

「闇の俺が力を使うとすればその力は闇…」

詰まりは触れたただけでお前達を闇で侵してしまう。」

「だが今の俺が力を使おうとしても闇の色が見えない…何故だ…？」

すると龍神は微笑みながら俺に言った。

龍神「案ずるな、お前の闇の力を我の光で覆っている…お前が使う力は全て光だ…」

龍「何？」

闇である筈の俺が何故に光の力を…

龍神「お前自身がそれ程邪気を持っていなかったお陰で、闇を光で覆う事に成功した…」

「お前が我と同じ優しさを持って生まれたからだ…」

優しさ…

そうか…闇の力は強かったものの、邪気が無い優しさを持って生まれたから俺は光の力を…

龍神「お前に我の名をやるっ…お前は今日から…」

「龍神…だ…」

龍「龍神…俺の名前…」

龍神「今日からお前は人間の世界に降りて、人間の為に戦う龍の神だ…」

「頼むぞ…」

龍神はそう言っつて、空高く飛び去った。

人間の為に…戦うか…

龍「おもしろい…やってやるうじやねえか…」

俺は微笑みながらそう言った。

すると、俺の体が突然浮き、地面に青い光が溢れ出した。

これが人間の世界の入り口…

俺はそのまま光の中に吸い込まれ…

気がついたら…森林の中に居た。

見渡す限り木、木、木。

下は土。

青空の先に山々が連なっている。



龍「なかなか良いところじゃねえか。」

俺がそう言つと…

何者かの気配が…

俺は気配を感じた瞬間、木に隠れた。

木に隠れた俺は顔を出し、周囲を見回してみる。

すると俺の視界に小さな子供2人が入った。

1人は幼い少年、もう1人は少年より背の高い少女の姉弟か…

少年「ねえお姉ちゃん…怖いよお…」

少女「…どうしよう…迷っちゃった…」

姉弟はどうやら道に迷ったようだな。

好奇心だけで動くとかクナ事が無いのを知らないのは怖いな全く…

と…そこに怪しいバケモノが突如姉弟の前に現れた。

何だこのゴツいだけのザコ野郎は…

少年「うわああああ！！！！妖怪だああ！！！！お姉ちゃああん！！！！」

少女「嫌ッ！！！！来ないで！！！！」

バケモノに対して姉弟は恐ろしい程に驚いた。

仕方ねえな…

龍「おい、バケモノ。」

俺は木から現れると同時にバケモノにそう言った。

それに対しバケモノは俺の方向を向いた。

龍「俺はなあ、おめえみたいな奴が嫌いなんだよ。」

バケモノにそう言うとバケモノは俺に向かって跳んで来た。

俺に勝てると思っているのか？

龍「死ね…」

俺は手を拳に変え、跳んで向かって来るバケモノの腹を目掛けて拳の一撃を繰り出した。

ドゴオオオッ！！！！

拳はバケモノの腹に見事命中。

その状態からそのまま拳を内側に捻り、力を加えるように拳で更に打ち込む。

するとバケモノの体を巨大なトルネードが突き破る。

バケモノは拳の一撃により体が大きく貫通し、トルネードの勢いに呑み込まれて消えた。

龍「ザコが…」

俺は腕を降ろし、手を思いつ切り払った。

おっと…忘れていた…

子供の姉弟っど…

とは言え、今ので逃げ出しちまったかもな…

そう思い、俺は横を向いた。

するとそこには、座り込んだ姉弟が居た。

少年「よ…妖怪さん…妖怪さんが…僕とお姉ちゃんを…助け  
てくれた…」

「凄いや妖怪さん!!!凄かったなあ…妖怪をこの一撃でバーンっ  
てやっつけちゃった!!!」

龍「おい待て、俺は妖怪じゃない…  
俺は龍神だ。」

少年「龍神?もしかして…龍神様の龍神?」

龍「それがどうした…」

少年「じゃあ神様なんだね!!!龍神さんって!!!」

龍「ん…まあな…一応、神と言えば神だが…」

少年「凄いよお姉ちゃん!!!龍神さん神様なんだって!!!」

少女「あの！あなたは他の妖怪とは違うのですか！？」

龍「俺をあ妖怪と一緒にするな。」

「俺の名は龍神…名の通り、龍の神だ。」

少女「龍神…？神様…」

俺はしゃがんで姉弟の目線に合わせて喋った。

龍「とりあえず、大丈夫か？お前ら。」

少年「うん！大丈夫だよ！」

少女「助けてくれてありがとうございます。」

龍「お前ら、名前何て言うんだ？」

少女「私は、<sup>あかり</sup>燈と言います。」

少年「僕は辰だよ！」

龍「何度もすまないが、俺は龍神だ。」

辰「龍神って名前、凄くカッコイイなあ……！」

燈「本当に助けてくれてありがとうございます！」

龍「おいおい、俺は別にお前らの為にやったわけじゃないぜ？  
まあ、困って居る奴は見過ごせないけどな……」

「こんな事言つのに、恥ずかしいな……」

龍「そうだ、お前らどうせ帰れないだろ。」

辰「うん……」

燈「はい……」

龍「んじゃ、お前らの家まで送ってやるよ。」

燈「えっ？良いんですか？」

龍「ああ。」

辰「本当に？」

龍「本当だ、ほら乗れ。」

辰「わぁ〜い！！！」

辰は俺の背中に飛び付いた。

燈「失礼しますね。」

燈も俺の背中に掴まった。

龍「んじゃ、しっかり掴まって居ろよ！」

俺は背中に掴まって居る辰と燈にそう言って、飛び立った。

今日はここまでだ。

悪いな、次はまた次回だ…

じゃあな…



特別話 第1 新年明けおめスベシャル！ 〳今年は辰年 龍の年〵（後書き）

次回は後編！！！！

いよいよ龍神が何故生まれ変わるに至ったか…  
その真相が明らかに…

ではまた次回。

特別話 第2 Before・the・episode (前書き)

Before・the・episode…

今回は前回の続き…

今回で龍の過去がわかる…かな…？

ではでは。

特別話 第2 Before・the・episode

さて…

前回の続きだ…

今回で俺の過去が全てわかるから、心配するな…

俺は今二人の姉弟を背中に乗せ、空を飛んでいる。

場所としてはかなり高い所を飛んでいる。

辰「わあ〜！！凄い高い！！！」

燈「気持ちいい！！！」

どうやら喜んでるようだ。  
よし。

龍「ならもつといい物を見せてやるっ！」

辰「本当？」

龍「ああ！しっかり掴まれ！」

俺は二人を腕で抱え、一気に上昇した。

雲を抜け、到達した場所：

そこは…

辰「わあ〜…龍神さん…ここは…？」

龍「ここは成層圏。お前達の知らない場所だ。」

燈「成層圏…」

成層圏…

普通、ここまで人間を連れて来る事は不可能だが、俺が二人の周りに気を張っておいた。

これで上昇時のGや急激な気圧の変化を消せる。

地上と全く変わりはない。

龍「どうだ？雲がほとんど無いんだぜ？」

燈「空つて…こんなに綺麗だったんですね…」

龍「ああ。」

辰「ねえ…龍神さんは、いつもこの景色を見ているの？」

龍「いつもじゃ無いけどな、たまにだ、たまに。」

「んじゃ、そろそろ行くか。」

俺は成層圏から一気に急降下し、森のスレスレを飛んだ。

龍「ところで、お前達の家は何処だ？」

燈「私達の家は…遠くてわかりません…」

龍「そうか、なら実際に降りるか。」

二人の家を探す為だ、降りて探すしか無いだろ。

俺は二人の家があると思われる真下の里に降りた。

里の反応はと言つと…

里人「うわあああああああ！！！！ばっ！バケモノだあああああ  
！！！！」

やはりな…

勿論、覚悟はしていたが…

ここまで驚かれるとは思っていなかったからな…

龍「辰、燈、ここにお前達の親が居るか？」

辰「うん…居ないなあ…」

燈「何処に居るかは大体わかります。」

龍「そうか、なら案内してくれ。」

俺は辰と燈を肩に乗せ、里の中を歩き始めた。

歩くと同時に里の人間が腰を抜かしたり、怯えて大声をあげたりして大変五月蠅かった。

俺の尻尾を突つく子供まで出て来たから尻尾で振り払ってやった。

暫らく歩いて居たら…

燈「あっ！父と母です！」

辰「お父さん！お母さん！」

龍「何処だ？」

俺の言葉に対し、燈が指を差した。

その方向を見ると、二人の男女が立っていた。

男の方はざんぎり頭、歳はかなり若い。

女の方は長髪の垂らし髪、こちらもかなり若い。

この二人が辰と燈の親か…？

すると突然辰が二人の親に向かって声を掛けた。

辰「お父さん！お母さん！ただいま！」

すると二人の親は…

父「辰！！」

母「燈！！」

辰「お姉ちゃん行こ！」

燈「うん。」

龍「じゃ、降ろすぞ。」

俺は辰と燈を肩から降ろした。

そして辰と燈は親の方へ駆け寄った。

親も二人の方へ駆け寄った。



そしてひしと抱き締めた。

しっかりと抱き締めた後、二人の親は辰と燈に聞いた…

父「辰、燈、大丈夫か？怪我は無いか？」

辰「大丈夫だよ！龍神さんが妖怪から僕達を助けてくれたから！」

母「龍神さん？誰の事？」

辰「あの人！」

辰が俺の方を向いて指を差した。

母「あの妖怪が？」

燈「違うわ！龍神さんは妖怪じゃない！」

「龍神さんは私と辰を助けてくれた優しい人よ！」

父親は立ち上がり、俺にお辞儀をした。

父「僕達の子供を助けて頂き、ありがとうございます！」

龍「ちょ、おい…わざわざ礼をしなくても…」

母「いいえ！助けてもらったのに、礼もしないのは余りにも失礼ですから！」

母親も揃ってお辞儀をした。

龍「そこまでされる程の事はしてないぜ？

ただ妖怪が気に食わなかっただけだ。」

辰「お父さん、それだけじゃ無いんだよ！龍神さんはね、あの龍神様なんだって！」

辰のその言葉を聞いた瞬間、父親、母親から周りで見ている里人までもが驚愕した。

里人「龍神様って言えば、この世界の神様って聞くが、本当か？」

龍「まあな、俺はお前達人間を守る為に、天からやって来た。」

そう言った直後、里人は凄まじく騒ぎ出した。

まあ、里人からしたら結構凄い事なんだよな…

すると群がる里人の中から一人の老いた爺さんが出て来た。

爺さんが手を挙げたら騒いで居た里人が全員一瞬で静まり返った。

誰だ？この爺さん…

すると辰と燈の父親が爺さんに近づいて行き、こう言った。

父「龍神さん、このお方はこの里の長…」

「最長老様です。」

なるほど、長老様な…

長老「貴方が、龍神様でいらっしやいますか？」

ヨボヨボな口で喋られるとずっとこけたくなるな…  
とりあえず返すか…

龍「ああ、そつだ。」

長老「おお！貴方様が……！！！！  
触らせてはくれぬか？」

龍「ああ、構わないが……」

俺は片方の手を爺さんに差し出した。

すると爺さんは俺の手に触れた。

その瞬間……

長老「おおお！！！！」

まるで爺さんに雷が落ちたかのような反応をした。  
しかも目が開いた……

長老「こ……この神々しい力は……！！！！」

「伝説の龍神様そのものじゃあああ——！！！！」

おいおい……

ヨボヨボな口で騒ぐな…

長老が発狂したと同時に里の人間が一齐に騒ぎ出した。

長老「皆のもの！今宵は宴じゃ！！！！」

里人「うおおおおおおおお！！！！」

龍「おいおい…」

里の人間がどうやら宴の準備をする様だな。

父「さあ、やるぞ！」

母「私も！」

辰と燈の親はそう言って準備に行ってしまった。

龍「ああ…たく…」

残されたのは俺と子供達だけだ…

と、そんな事を思っていたら一人の子供が…

子供「龍神様、一緒に遊ぼう！」

龍「へっ？」

子供「遊ぼうよ龍神様！」

龍「おいおい、遊ぶって何で…」

子供「何でも！」

龍「・・・」

辰「いいから龍神さん遊ぼう！」

燈「お父さん達の宴の準備が終わるまでですから。」

龍「そうか、なら…」

「お前達が疲れ果てるまで遊んでやるよ!」

まずは鬼!」

辰「じゃあ龍神さんが最初に鬼!」

龍「おいおい、俺を鬼にして良いのか?」

辰「空飛んじゃダメだよ!」

龍「わかってるわかってる。」

辰「よし!みんな逃げろ!」

龍「1・2・3・4・5・6・7・8・9……」

「10!」

数え終わると同時に音速で子供の一人に近づき、体に触れた。

子供「ええ?そんな!」

龍「空は飛んで無いだろ？」

辰「ズルいよ龍神さん！速く走るのもダメ！」

龍「…わかったよ。」

辰「みんなもう一回逃げろ！」

龍「たく…1・2・3・4…」

すると燈が横に現れた。

燈「どうですか？人間の遊びは？」

龍「なかなかおもしろいな…」

そう言った俺は燈の肩に触れた。

この意味はと言つと…



龍「お前が鬼だ…」

燈「えっ？あっ！」

龍「ははっ、油断するからだ。」

俺はそう言つと走り出した。

燈「もう！…うふふ、1・2・3…」

まあ、速く走らない鬼ごっこは面倒くさいが、なかなかおもしろかったな。

次にやったのはけん玉…

燈「できますか？」

龍「まあ、できない事も無いが…」

とりあえず俺はやってみる事に…

玉を垂らした状態から持ち上げて、けんの先に突き刺す…

俺は玉を引っ張って浮かせた。

と、その時気づいた。

玉…遅く見えるな…

俺の動体視力を使えば何も問題無い事だった…

そして俺はゆっくり動く玉を見てけん先に通した。

龍「よつと…」

燈「わあ…いきなり玉の穴に通すなんて…！」

子供「凄い…！」

龍「ああ…まあな…」

何故か凄いと言われる…

まあ…いいか。

と、そんな事を思っ居たら…

辰「龍神さん、お父さん達が宴の準備できたから来てくれたって。」

龍「やつとか…」

俺は はあ… と溜息を吐き、辰の案内に付いて行った。

で…

里人「かんぱい！！！！！！」

龍「あゝ…乾杯…」

何かよくわからないが…凄じ盛り上がりだ…

この俺も流されてしまいそうな勢いだな…

しかし、この里に大宴会場があるとはな…

驚いたぜ…

長老「龍神様！今宵は飲み明かしましょうぞ！」

龍「あつ？ああ…」

爺さん「凄え元気じゃねえか！」

「一体何があつたんだ？」

さつき「見たヨボヨボの爺さんとは別人だぞ！」

心の中でびっくり仰天した俺に辰と燈の父親が話し掛けてきた。

父「どうしたんですか？龍神さん、飲みましょうよ。」

龍「ああ…そうだな。」

母「元気が無いみたいですけど、どうしたんですか？」

龍「いや、元気が無いわけじゃ無いんだ。」

「ただこの空間に慣れて無いだけだ。」

父「なんだ、そうなんですか。」



龍「こんな杯じゃ足りねえ！タルごと持って来い！！！」

里人「合点だ！！！」

そう言った里の人間の一人が何処かへ行き、そしてすぐにタルを抱えて戻って来た。

龍「よおし！！！」

俺は目の前に置かれたタルを持ち上げ、ガバガバと浴びるように飲んだ。

それを見た里人達は歓声を上げた。

龍「プハアッ！じゃんじゃん酒を持って来い！！！」

そんなこんなで凄まじい盛り上がりを見せた宴……

さすがの俺も疲れた……

体は疲れない……疲れたのは精神だ。

今日は誰かの家の屋根で寝る事にした。

龍「はあゝ…」

夜空には美しい星々が光り輝いている。

星座がはっきり見えるな。

元々夜自体を知らなかったこの俺が、この世界に来て初めて星と言  
うのを知り、その美しさに魅了された。

何て美しいんだ…

心で俺はそう呟いた。

今夜はとて良く眠れそうだ…

俺はその後も里に居続け、仕事を手伝い、妖怪から里人を守り続け  
た。

それから何年か経った…

辰は心優しい立派な青年に成長し、燈もお淑やかな大人の女性に変わった。

辰と燈の父親や母親は大分歳老いた。

長老もこの世を去り、新しい長老が決まった。

里の人間が世代交代に入って来た頃だ。

俺はいつものように薪の為の木を根っこから引き抜いて、里に持ち帰っていた。

龍「これだけありゃ大分持つだろ。」

何本か引き抜いておいたから、里の人間全員が一ヶ月持つのは確かだ。

いつも通りに仕事を楽々こなす俺に…

突然……

龍「ん？」



？「マスタースパーク！」

気配を感じた瞬間誰かの声が聞こえた。

気配を感じた方向を向くと…

青白い巨大波動砲が俺の目の前に存在した。

反射神経を最大限活用して、俺は巨大波動砲を避けた。

避けた波動砲は木々を消し飛ばし、地面に巨大なクレーターができた。

誰だ…？俺に向けて波動砲を放った奴は…

俺は波動砲が放たれた方向を見た。

そこには…

緑髪の長髪に、月の絵が入った帽子を被った女が居た。手には月のロッドを持っている。

女は俺の問いに答えない。

龍「誰だと訊いているんだ…！」

少し強く訊いてみた。

すると…

？「私は魅魔<sup>みま</sup>。」

「これでいい？」

女の返しに対し、俺は怒りを覚えた。

龍「はっ？人にいきなり波動砲を撃っておきながら何だその態度は…？」

「お前の所為でな、折角取った木まで消し飛んぢまったじゃねえか！」

俺の言葉に対し、魅魔とか言う女はこう言った。

魅「木なんて置いていて、貴方は…」

「龍神様…よね？」

龍「それがどうした？」

魅「貴方が人里で神様だって言われてるのを小耳に挟んだのよ。」

「ひよつとしたら、と思ってね。」

ただそれだけの為に…だと…？

こいつ…ムカつくな…！

俺は溢れる怒りの力を抑える。

だが、それでも口の中に生えてくる牙は隠せない。

龍「ただ…それだけの…それだけの為にか？」

魅「まあ、そうね…それだけね。」

その言葉に対し、更にムカついた…

今度は瞳が赤く染まった。

視界が若干赤く滲む。

魅「何？何か明確な理由が欲しかった？なら…」

「貴方が龍神だと言うなら、その力を試しておきたいと思ってね。」

龍「そうか…」

試す…？

こいつ、とことん逆鱗に触れる奴だな…！

龍「理由？もうそんなくだらねえ物要らねえよ…何故か？わかるか？」

魅「貴方が戦う理由？何かしら？」

龍「それはな…」

「お前が俺を怒らせた…それが戦う理由だ…！！！」

その言葉を放ったと同時に俺は魅魔の目の前に現れた。

俺が目の前に現れた瞬間、魅魔は驚いた。

驚いた瞬間に俺は魅魔の顔面に拳を叩き込んだ。

魅魔は殴られた勢いそのままで吹っ飛び、地面に直撃し、巨大な地割れできた。

俺は魅魔に近づいた。

龍「どうした？俺を怒らせたなら、怒らせたなりに力を見せてみるよ…？」

すると、魅魔が口から血を流しながら立ち上がる。

龍「ふっ…あの程度で既に血を出すか。

今の拳は全力の100分の1だ、次は90分の1で行くぞ。」

俺の言葉に対し、驚きを見せる魅魔。

この程度で驚いて居ると、死ぬぜ？

俺は間髪入れずに拳を魅魔の目の前に突き出し、寸前で止めた。

魅魔が驚き、目を瞑った。

龍「何をビビって居る？次はお前の攻撃だ…」

俺は拳を降ろし、魅魔に攻撃を譲った。

すると魅魔は攻撃を始めた。

弾幕の攻撃を…

弾幕か…なかなかおもしろい攻撃をするな…

だが…

龍「雑魚いんだよ…」

怒りを解放した俺に弾幕のようなヤワな攻撃は…

龍「効かないんだよ！」

俺は魅魔に親指で止めた中指を額に当て…

弾く！

見事な程の綺麗な音が鳴り響き、魅魔は木々をへし折りながら吹っ飛んで行った。

俺は吹っ飛んだ魅魔にゆっくり近づき、こう言った。

龍「どうだ？俺の攻撃は…？」

すると魅魔は額から血を流しながら答えた。

魅「なかなか…痛いわね…特に、さっきの指弾き…」

龍「ははっ…デコピンがそんなに効いたか？  
お前弱いだろ？」

魅「はっ？何ですって？」

龍「聞こえなかったか？よ・わ・い と言っただ。何ならもう一回言っが…」

魅「…十分わかった…なら…」

「私の本気を見せてあげる…！！！」

魅魔がそう言った瞬間、強い力を感じた。

ほう〜…なるほど…

仕方ねえ…長引かせてやるか…

龍「来いよ。」

俺は指で魅魔に 来い という風に動かす。

すると魅魔弾幕を容赦無く大量に撃って来た。

俺は弾幕を見切り、かわしながら潜り抜ける。

敢えて攻撃はしない…

あいつの本気を存分に見させてもらおうとしよう。

龍「どうした？弾幕とは言えない隙間だな！こんなんで俺を試すだ  
と？ザコが！」

魅「黙れ！」

魅魔は両手を合わせ、力を溜め始めた。

青白い光が中心に集まり、強く輝いた瞬間…

魅「マスタースパーク！」



魅魔は合わせた両手から青白い巨大波動砲を撃ち出した。

またあの波動砲か…

一度やった技が二度通用すると思って居るのか？

まあ、一度もくらって無いがな…

放たれた波動砲の真横に動き、俺は一瞬で魅魔の目の前に現れた。

魅「なっ？」

龍「お前…マジで弱いな。」

ガツカリだ…期待した俺がバカだったな。」

「モーションに無駄がある技程、避けやすい物は無いんだよ！」

俺はそう言い、魅魔の腹に拳を打ち込んだ。

打ち込んだ瞬間に凄まじい音が鳴り響き、周囲に衝撃波が広がった。

魅魔は拳の一撃により、激しく血を吐いた。

俺は静かにこう言った…

龍「まだ、血を吐くのは早いぜ？」

こっから吐く血が無くなるかもしれないからな…」

そして瞬間俺は腕を素速く振りかぶり、裏拳を魅魔の顔を叩き込む。それで勢い良く吹っ飛んだ魅魔を光速で追い越して先回りをし、回し蹴りで真横にすっ飛ばした。

直後再び先回りし、拳で先ほど居た場所まで吹っ飛ばした。

この時点で既に魅魔はグロッキー状態だが、致命傷にならない程度に俺は殴って殴って殴り殺す。

龍「こんな弱攻撃で死ぬなよ？」

俺は静かにそう言い、魅魔の到達する場所まで先回りし、膝蹴りを腹に見舞う。

魅魔は膝蹴りで再び吐血。

今度はさっきより量が多い。

ここからどうなるかな…？

俺は魅魔の頭を掴んで引き寄せ、頭突きをくらわせる。

これにより魅魔の額が更に血の色に染まった。

更にこっから上方方向に蹴り飛ばし、ある程度距離が空いたら魅魔の

到達地点まで先回り。

上半身の捻りを活かし、下半身を自然体で動かして魅魔に右脚の回し蹴りを与える。

こっから上下の繰り返しだ。

魅魔が下に吹っ飛んだと同時に、先回り。そっから真上に蹴り上げ、吹っ飛ばす。

ある程度進んだらまた先回りし、両手を合わせて握り、ハンマーのように振り下ろし、腹に叩き込む。

そして再び魅魔が吹っ飛び、魅魔が吹っ飛んで行く場所まで先回りをし、拳を振り上げて真上へ吹っ飛ばす。

そして真上へ魅魔が来る前に先回りし、トドメに回転踵落としを魅魔の腹に叩き込んだ。

凄まじい勢いと速さで魅魔は地面に真っ直ぐ直撃し、地面の破片を撒き散らし、巨大なクレーターを出来上がらせた。

遠目からでもわかる程魅魔は血を吐いた。

口周りを血だらけにし、そのまま…

龍「死んだか？」

俺は魅魔の側まで近づき、脈を調べた。

・・・

どうやら生きて居るようだ。

だが、このままじゃ命が危ないな…

俺は魅魔を抱え、里まで光速で戻った。

魅「ん〜…ああ…」

「此処は…?」

龍「起きたか。」

魅「あつ！貴方！さっきはよくも…」

龍「その身体で暴れられると思うなよ。」

魅「くっ！何故トドメを刺さなかったのよ!」

龍「トドメなら刺した。ただお前がそれで死ななかつただけだ。」

まあ、力はほとんど入れて無いからな…

魅「ふん…」

龍「まあ、そう云う態度を執られても仕方ないとは思っている…」

魅「貴方は、一体何者なの？」

龍「俺か？」

「俺の名は龍神…名の通り、龍の神だ。」

そう言ったら魅魔は少し驚いた顔をしていた。

そしてすぐにその顔が元に戻った。

魅「改めて良くわかったわ。貴方が本当の…龍神様だと言う事が…」

龍「そうか、怪我が治ったらすぐ帰れよ。」

「あまり長居されても困るからな。」

魅「その心配には及ばないわ、すぐにここから出て行くから…」

そう言うと魅魔は立ち上がり、家を出た。

魅魔が家を出た後、俺も後を付いて行き、家を出たら…

既に魅魔は居なかった。

何処を見回しても魅魔の姿は無かった。

するとそこに…

燈「龍神さん、どうしたんですか？」

龍「おお、燈か、どうした？」

燈「魅魔さんの具合を見に来たんです。」

龍「ああ、あいつならもう此処には居ないぜ？」

燈「えっ？何ですか？」

俺は暫らく空の一点を見つめ続けた。

燈も俺と一緒に一点を見つめた。

すると…

辰「龍神さ〜ん！」

龍「何だ？」

辰「いいから来て来て！」

龍「おいおい…！」

辰がかなり強く引っ張る為、俺は少しバランスを崩しかけた。

とりあえず引っ張られるまま付いて行った。

そして辰が足を止め、ある方向を指差した。

そこには…

龍「何だこりゃ？」

燈「凄い！」

俺の目の前には 何と俺が居た。

しかもかなり俺の姿と酷似しているな…  
腕組みの仁王立ちとは…なかなかおもしろい…

石像はかなり細かく造られている。

俺は石像と同じポーズを執ってみた。

里人「うわああああああカッコイイぞ龍神様あああああ！！  
！！！！」

龍「ああ？そうか？あははははは！！」

「ところで、これを造った奴は誰だ？」

里人「はい、あっしです！」



里人の群がりの中から一人出て来た青年。  
俺はその青年に近づき、こう言った。

龍「いい腕を持つてんな。その才能、これからも人の為に使えよ。」

里人「はい!!!ありがとうございます!!!」

俺は青年の肩をポンと叩いた。

そしてその瞬間俺は強力な敵の気配を感じた。

辰「龍神さんどうしたんだよ?そんな真剣な顔して。」

燈「そうですねよ、この石像のお祝いをしましょう。」

龍「いや、すまないがそれはできない。」

辰「えっ?何ですか?」

龍「凄え力を持つ奴が、此処に向かって来ているんだ。」

すると辰と燈が心配そうな顔をした。

俺は微笑みながらこう言った。

龍「大丈夫だ、必ず帰って来る。

お前達のこの里に必ず……」

俺はそう言い捨て、黄昏の空に向かって飛び立った。

龍「さて、何処に居るか……」

里が完全に見えない場所まで離れ、俺は敵の捕捉を行った。

するとその気配は真上からだった。

俺は真上を向いた。

するとそこには紅白の巫女らしき者が居た。

龍「誰だお前……？」

「……？」

無視か…？

だとしたら無理矢理でも口を開かせるしかねえな。

そう思い、俺が動こうとした時…

俺目掛けて札が投げられた。

俺は投げられた紙の札を手に取り、グシャグシャに握り、捨てた。

こんな物で俺を倒せると思って居るのか？

バカな奴だ…

龍「考えが…」

「甘いんだよ！」

俺は瞬間に拳を巫女の顔面に打ち込んだ。

すると良い音が巫女の顔から鳴り響いた。

どうやら今の一撃で口から血か…

龍「何故、俺を狙う。」

大方、妖怪と間違えたんだろ？」

？「違うわ。」

おっ？要約口を開いたか。

さて、どんな言葉がでるかなっと…

龍「んじゃ、何が理由だ？」

？「巫女として、退治するべき相手だからよ。」

龍「…まあいいや、ただ一つ言っておく…」

「お前のヤワな攻撃じゃ、俺は倒せない。」

？「じゃ、それなりの技で対応しないといけないわけね…わかった。」

「夢想最終奥義！…！」

最終奥義か…

受けて立ってやるよ…

俺は空中で仁王立ち状態で巫女の攻撃を待った。

そしたら…

？「「夢想天生」！！！」

巫女は両腕を広げ、無数の弾幕を放った。

弾幕の一つ一つの密度がかなり高い。

隙間も無えじゃねえか…

龍「くらってみるか……」

俺は仁王立ちのまま無数の弾幕を…

受けた！

凄まじい勢いと威力…

それに加え絶対的な数の弾幕…



巫女は凄く驚いて居るな…  
無理も無い…

何せ俺は傷だらけで空中に仁王立ちしているんだからな…

俺は黙ったまま右手を拳に変え、力を溜めた。

右拳に白い光が集まり、やがて白い光が黄金の光へと変わり、光が龍の顔に形を変えた。

そして右腕を思いつ切り引き、腰も使って溜め…

溜めた力を一気に解放し、腰、腕を最大限使い拳を巫女に突き出した。すると拳の黄金の光が超巨大な黄金の胴長龍へと姿を変え、巫女に向かって飛ぶ。

黄金龍は口を開け、巫女をくらった。

黄金龍はそのまま巫女を貫いた。

？「ああ…！！くああ…！！！！！！」

巫女は全身を俺以上にスタボロになり、森の中へ落ちて行った。

しかし…

これはひでえな…

かなり血だらけじゃねえか…

意識も遠くなってきた…

死ぬって言うのはこう言う事だったんだな…

めちゃくちゃ虚しいな…

…

ゴメンな…辰…燈…

必ず帰るとか言っておいて…結局帰れなくて…

……………ゴメン……………な……………



・  
・  
・

ん？何だ？

何処だ此処は…？

？「龍神よ…」

その声は…龍神…！

龍神「龍神よ…お前は死んだのだ…」

ああ…知ってる…

あの時の事はしっかりと覚えている…

龍神「どうだった？人間の世界は…」

なかなかおもしろい世界だったぜ…

いい思い出にもなったしな…

龍神「そうか…それはよかった…」

龍神「この後、俺はどうなるんだ？」

龍神「案ずるな…お前は百年後、人間に生まれ変わる…」

生まれ変わる？

何でだ…？

龍神「お前は…まだやる事がある…  
それに、まだお前はこの世を知って見た方が良い…」

ふふっ…

そうか…

龍神「お前にその時が来るまで…」

「暫し休むが良い…」

わかった…

こうして、俺は…

百年後…

拳咲　龍神　として…

新たな人生を歩んだ…

龍「どうでしたか？」

「これが龍の過去だったんですね…」

「もう今日は龍の過去を知る事ができて満足ですよ。」

「では監ちゃん…ちよひならん…」

特別話  
完

特別話 第2 Before・the・episode (後書き)

今回は長文にしました。

龍神の過去…いかがでしたか？

感想を頂けると嬉しいです！

では、本編へ…

おお？知らない内にPVが20000を超えている…

おまけにユニークまで4000に達した…

ここまで読んでいる方々が居る何て…！！！！

読者様に感謝！！！！

ありがとうございます！！！！！！

親友 桐生 誠 幻想入り！（前書き）

今回は拳咲 龍神の親友、桐生 誠の幻想入り物語です！

どうでもいいけどこれじゃ本編が進まないですよね…

次回こそ書かなくちゃ…

ではどしどし。

親友 桐生 誠 幻想入り！

今回の俺…いや、誠は…

作者の気まぐれによって幻想入りし、異能力を手に入れてしまった  
誠。

その異能力とは…

…

ええ…何と言うか…その…

ここ何処…？

俺の知らない場所だと言うのはわかるな…

けど…

あれは何だったんだ？

突然地面が開いて…気がついたらこれだよ…

何がどうしたらこうなる？

たく…

とりあえず、自己紹介するか…

俺は桐生 誠

15歳の中学生

みんなは知っているだろうけど、俺は拳咲

龍神の親友だ。

あいつと違う所を挙げるとすれば…

東方厨と言うところかな…？

まあ説明はこれくらいにして…

まあ…予想が付いた…

此処は幻想郷だな。

全てがゲームと酷似している。



て…事はあの地面の穴は紫か…  
でないところな所には来ない。

いや、でも来れて嬉しいね。」

普通の奴ならこんな体験一生掛かっても無理だからな。  
俺は超っっている。

とりあえず、立ち上がるとしますか…

誠「んゝ…ああ…！空気がおいしい！」

凄いな！俺らの世界とは真逆だ！

自然が溢れるこの世界には、存在を認められなくなった妖怪や鬼が  
居るんだってな。

くうゝ！幻想郷ライフ、楽しんでやるぜ！

とは言え、能力が無い限りいざルーミアが出て来たらヤバいぜ…

とにかく、この森から出ないとな…

俺は森から出る為、歩き始めた。

誠「いやゝ…しかし…マジで道わからんよ…」

全く、やってくれるな紫…

気まぐれな性格は誰かと変わらねえな…

あ、これ作者の事だぜ？

…

博麗神社の場所さえわかればなあ…

と、そんな感じで俺が歩いていたら…

？「あつ！おいしそうな人間が居る。」

この声…ルーミアとはまた別の…

ん…

みすちー！

いや…ミスティア・ローレライだな。

俺は声の方向を向いた。

そしたらやっぱり…

誠「やっぱり…ミスティアか…」

「何だ？俺を食ったのか？ミステリア・ローレイ。」

ミ「！？」

ミステリアが驚くのも無理無いぜ。  
初対面の人が名前知っていたら誰でもびっくりするぞ。

それに…

何だか俺の目の前に…人らしき陽炎が…いや、違う……これは……  
！！！！

まさか？

誠「す…スタンド？」

と驚いて居たら…

ミ「何でもいい、私はあなたを食べるから…」

すると、ミステリアは長く鋭い爪を両方の手の指から生やし、俺に向けて爪を突き出して来た。



何者かの叫び声が聞こえた。

目を開けたら、そこには…

「ミ」なっ？何？

ミステリアの手首をかなりデカイ手が掴んでいる。

俺の目の前には…

下半身に鎧を身に付け、上半身は裸。

しっかりと影がわかる程の背筋。  
全身の筋肉がびっしりと目立つ。

何だこいつは？

すると、俺のスタンドと思われる奴が右横を向き、後ろ目から俺を見た。

？顔が！！！！

長く力強い口…

綺麗に伸びた二本の角…

間違い無い！龍！

このスタンドは龍人型だ！

まさしくスタンド！

すると俺のスタンドがミステリアを突き飛ばした。  
そして俺の方向を体ごと向けた。

俺は聞いてみた…

誠「お前は…俺の、スタンドなのか？」

そう聞くと、龍人型のスタンドが頷いた。

そうか…よし…！！！！

誠「なら…」

「一緒に戦おうぜ！」

俺のその言葉と共に龍人型のスタンドは俺と同じ方向を向き、同じ構えを執った。

これがスタンドって奴か…

ジジのようなこの力…

試してやる!!!

誠「さて…まずは…」

「パンチを繰り出してみるか。」

俺は動きをイメージし、ミステリアに近づきながら行った。

すると、スタンドの拳が動き、ミステリアの右頬を殴った。

殴られたミステリアはまっすぐ吹っ飛び、後ろにあった木に激突した。

誠「凄え…本当に殴ったよ。」

イメージで体の四肢を動かせる。

俺が動いても動かせる。

スタンドって凄え…

さて、戻りまして…

誠「そろそろ決めるか。」

俺はミスティアにゆっくり歩いて近づいた。スタンドの拳をバキボキ鳴らしながら……

立ち上がったミスティアに俺はこう言った。

誠「ミスティア、お前に地獄を見せてやるよ」

頬が腫れ上がった状態でミスティアは俺を遠ざけようと弾幕を撃つが、どれも的はずれに飛んで行くのみ。

ミスティアの目の前で立ち止まり、俺はこう言った。

誠「悪いな、俺は女だろうと好きなキャラ以外手加減しないからな。」

「恨むならお前が俺を選んだ判断を恨めよ？」

ミ「いやあ………！」

誠「んじゃあな……」

俺はスタンドの拳を引き、高速で突き出した。



誠「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラ……!!!」

「オオオラアアアア!!!」

誠「さて、敵は倒したし、お前の名前を聞こうか。」

俺はスタンドに尋ねた。

すると俺の頭の中に文字が現れた。

何だ？

……大空……？

ザ・スカイ……？

なるほど……

誠「お前の名前は  
ザ・スカイ  
大空か!!!」

「じゃあ行くっぜ！ザ・スカイ！」

「この幻想郷を思いつ切り楽しもうぜ！」

続く…

親友 桐生 誠 幻想入り！（後書き）

桐生 誠のスタンド紹介…

ザ・スカイ  
大空

皮膚の色が青く、大空と言う名前の由来でもある。

龍神と同じ筋肉が逞しい人型の龍

龍人型…

普段は肩や下半身にだけ鎧を着けている。

スタンドの身長は1 m 9 0 c mと龍神より低い

名の通り、空に精通した能力を持つ。

パラメーター

破壊力〃 A +

スピード〃 A +

射程距離〃 B

持続力〃 B

精密動作性〃 A

成長性〃 A

破壊力、スピード共に歴代スタンドの中で最強  
射程距離はBだが、3 mと意外に短い

精密な動きはかなり得意で、攻撃や能力に様々な工夫が出来る  
成長も早く、3日もあれば簡単に完成する

破壊力、スピードは…

晴天かつ空の光を浴びる環境下であれば力が+される  
持続力の場合も同じく、空の光を浴びる環境であれば無限にその能力を発動して居られる

勿論、晴天で無く、空の光を浴びる環境下で無くてもパラメーター通りの力を発揮できる

また、特殊な事にこのスタンドはスタンド使いで無くても視認でき、触れられる。

ただし、弾丸や刃物や鈍器はすり抜ける

能力は（大空を操る程度の能力）

喋る事はできない代わりに意思表示の為に頷くなどがある

今回はようやく本編…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7874x/>

---

東方龍神録

2012年1月6日20時48分発行